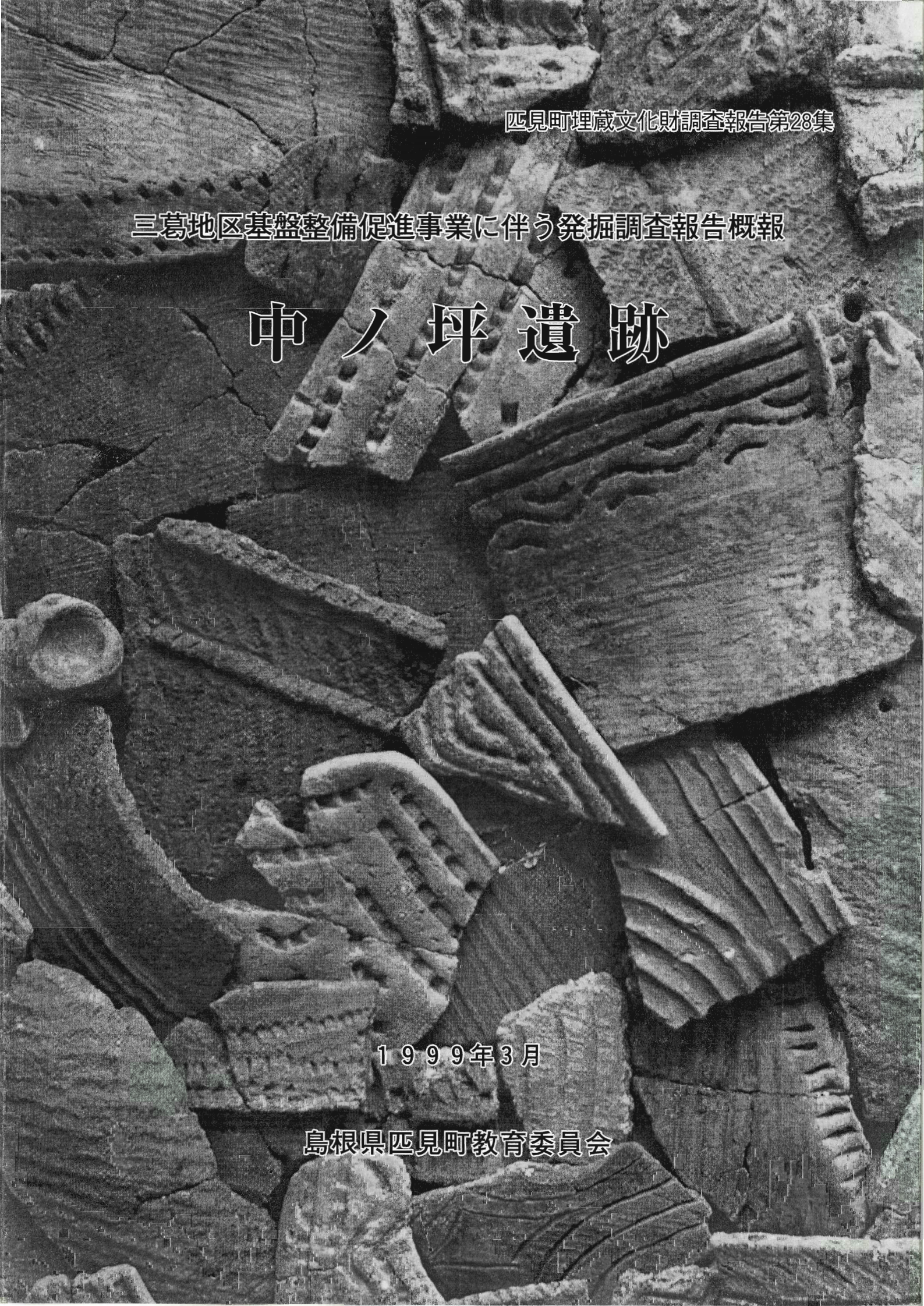


匹見町埋蔵文化財調査報告第28集

三葛地区基盤整備促進事業に伴う発掘調査報告概報

中ノ坪遺跡

1999年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告第28集

三葛地区基盤整備事業に伴う発掘調査報告概報

中ノ坪遺跡

１９９９年３月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1．本書は美濃郡匹見町土地改良区の委託を受けて，匹見町教育委員会が平成10年度に行った三葛地区基盤整備促進事業に伴う，中ノ坪遺跡の発掘調査概報の報告書である。

2．調査は，島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会	
調　査　員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡　辺　友千代
調査補助員	匹見町教育委員会主事	山　本　浩　之
	匹見町埋蔵文化財調査室	栗　田　美　文
調査協力者	大　賀　幸　恵	大　谷　真　弓
調査指導	島根県教育委員会文化財課	
	山口大学人文学部教授	中　村　友　博
	別府大学文学部教授	橘　　昌　信
事　務　局	匹見町教育委員会教育長	斎　藤　惟　人（平成10年10月8日まで）
	〃	寺　戸　　等（平成10年10月9日から）
	匹見町教育委員会次長	渡　辺　　隆
	匹見町教育委員会主任主事	斎　藤　一　臣
発掘作業員	栗田　定　　森脇　雅夫　　渡辺　照　　斎藤　直行　　栗田　修	
	藤本　和正　　栗田　勉　　大谷　介三　　渡辺　聡　　栗田　剛	
	長谷川時子　　大谷　幾子　　大谷ミツコ	

3．調査に際しては，美濃郡匹見町土地改良区をはじめ，島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただくとともに，山口大学人文学部の中村友博教授，また別府大学文学部の橘昌信教授らからも一方ならぬご教示を得たことに対し，ここに合わせて感謝の意を表したい。

また，発掘現場においては，土地所有者の斎藤元和氏をはじめとし，地元の方々にご理解と協力を得て，ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4．今回の調査において，柱穴遺構－Ｐ，土坑状遺構－ＳＫ，住居址－ＳＩと略号している。なお現場あるいは編集に利用した現地地図は，美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た１／1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺１／25000を使用した。なお現地における標高測量は株式会社ワールドの協力を得て行った。

編集にあったては，栗田美文・大賀幸恵・大谷真弓らが図化するなど分担し，執筆・編集は渡辺友千代・栗田美文が行ったものである。

目　　次

第１章　発掘調査の経緯と経過……（渡辺友千代）……1
第１節　発掘調査の経緯……1
第２節　調査の経過……1
葉書通信（山口大学人文学部教授　中村友博）……1

第２章　地区の地理・歴史環境……（栗田　美文）……2
第１節　地理環境……2
第２節　歴史的環境……2

第３章　調査の概要……（渡辺友千代）……5
第１節　調査地点域と調査区設定……5
１．調査地点域……5
２．調査区設定……5
第２節　層序と層位……5
第３節　遺構……6
１．はじめに……6
２．各遺構の概要……11

第４章　出土遺物……（渡辺友千代）……17
第１節　はじめに……17
第２節　実測土器……18
１．掲載方法……18
２．実測土器……18
３．押引文系の土器について……30
第３節　出土石器……35
１．はじめに……35
２．図版掲載石器……35

挿図・図表目次

図１　遺跡位置と周辺の周知遺跡……3
図２　調査区配置図……4
図３　遺跡立地と層序……7
南からみた調査地点
調査地点（北西から）
遺跡周辺の地形断面図
北壁（東半）土層図
土器片・石器出土状況（３層黒色粘質土）
図４　遺構指示図……8
遺構指示図
北半部の発掘状況（西から）
南半部の遺構表出状況（南から）
SI検出状況（南から）
SI断面深度図
図５　遺構状況と立体図（１）……9
南からみたSK22の表出状況
南からみたSK29の盤状配石状況
南西からみたSK35の検出状況
南からみたSK40の表出状況
南からみたSK41の半截状況
南からみたSK59の盤状立石
図６　遺構状況と立体図（２）……10
S72 ―― 立体図
東からみた遺構表出状況
東からみた土坑陥入状況
南上からみた遺構表出状況
土坑周辺のピット表出状況
SK70 ―― 立体図
南からみたSK69（左）とSK70の表出状況
SK28の立石（東から）
SK33の立石（北東から）
図７　その他の遺構と検出状況……13
SIに陥入した３層黒色粘質土（東から）
東からみたSIなどの遺構検出状況

南からみたSK29（左）とSK06の表出状況
南からみたSK06（集石炉）の検出状況
SK04に堆積した炭化物・焼土（南から）
拡張区の東壁に表出した配石
東からみた北西端部の配石状況
南西半の完掘状況（北西から）
図８　遺構全図……14
図９　遺構計測表……15～16
図10　出土土器類１……19
１．ＩＡ１・ＩＡ２・ⅡＡ１群～
２．～ⅡＡ１・ⅡＡ２群～
３．～ⅡＡ２・ⅡＡ３群～
４．～ⅡＡ３群（～図14へ）
図11　実測土器（１）……20
図12　実測土器（２）……23
図13　実測土器（３）……24
図14　出土土器類２……27
１．（図10-4～から）ⅡＡ３・ⅡＡ４・ⅡＢ１群～
２．～ⅡＢ１・ⅡＢ２群・ⅡＣ類～
３．～ⅡＣ・ⅢＡ類～
４．～ⅢＡ・ⅢＢ類
図15　実測土器（４）……28
図16　実測土器（５）……31
図17　その他の刺突・押引文系土器……32
図18　押引文系の口縁部・文様形態パターン図……33
図19　出土石器類１……34
１．尖頭器・磨製石斧・打製石斧
２．凹石・磨石・敲石
３．石錘・石錐・柳葉形石器
４．石匙・石鏃
図20　出土石器類２……37
１．細部調整のある石器（大片）
２．細部調整のある石器（小片）・楔形石器
３．大型剥片
４．玦状耳飾・チャート片・水晶片・黒耀石片
図21　石器集計表……38

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯

島根県美濃郡匹見町大字紙祖の三葛（みかずら）地区に所在する本遺跡は，平成８年から実施された三葛地区基盤整備事業に伴う発掘分布調査で明らかになったものである。その分布調査は，平成９年10月27日から同年11月27日まで実施した２箇所のうちの１地点で，その地名を中ノ坪（なかのつぼ）と呼称されていることから命名したものである。

当調査では，黒色粘質土の６層から曽畑・轟式系の土器片が約200点余り，そして楔形石器・石鏃・石錘・石器剥片などの石器類250点が出土した。また７層の黄褐色粘質土との層界には数坑の遺構も検出されたが，分布調査という狭掘から，それらの性格は明らかにできなかったのである。

第２節　調査の経過

上記のとおり，本地点が遺跡であるということが確認されたので，基盤整備事業に伴い，平成10年度に本格調査を実施することにした。

まず平成10年６月29日付で，文化庁宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し，調査は同年７月６日から行った。調査中には山口大学人文学部の中村友博教授が同年８月６・７日の両日，そして同年９月24・25日には別府大学文学部の橘昌信教授が発掘指導に来跡された。両教授とも共伴遺物から縄文時代前期前半の配石（集石）墓群であること，しかも遺構が比較的明確である，ことなどを評価された。

こうした本遺跡の重要性から，事業者側は同年９月末に盛土工法を決定したのであった。そして調査は，破壊が危ぶまれていた同地点のみとして，同年10月15日に無事終了した。また当遺跡は，その重要性から，平成11年度には町の史跡として諮問される予定である。

（渡辺　友千代）

葉　書　通　信

前略

以下，私の中ノ坪遺跡での見学の印象を添えておきます。

　中ノ坪遺跡から出土した土器は，縄文時代の前期を中心として，その前後に夛少にわたる時期のものである。その最大の特徴は，山陽の磯の森式にみるような典型爪形紋を飾る土器がないかわりに、押引紋の土器に各種の変化をみることである。したがって大分県の羽田遺跡や山口県の月崎遺跡下層がもっとも近似した内容と言える。

　中ノ坪遺跡の今回の発掘成果の一つは，この種の押引文土器にやや時間的な幅があることを示唆した点である。

草々

中村友博教授の葉書より（平成10年８月11日付）

第２章　地区の地理・歴史環境

第１節　地理環境

匹見町は，島根県の南西端に位置し，山口・広島の２県に接した西中国山地とも呼ばれている山間地に立地している。町内には，その中国山地の脊梁部に源をもった匹見川が北東方向に狭長な谷平地を形成しながら貫流している。これらの谷平地は，有力支流である紙祖川や赤谷川，広見川などが匹見川へ合流する相会地に形成されているのである。しかし，谷平地とはいっても，傾斜度をなす山間地に立地しているため極めて狭少であり，したがって可耕地も少なく，96％は山野で占められているという立地下にある（図１）。

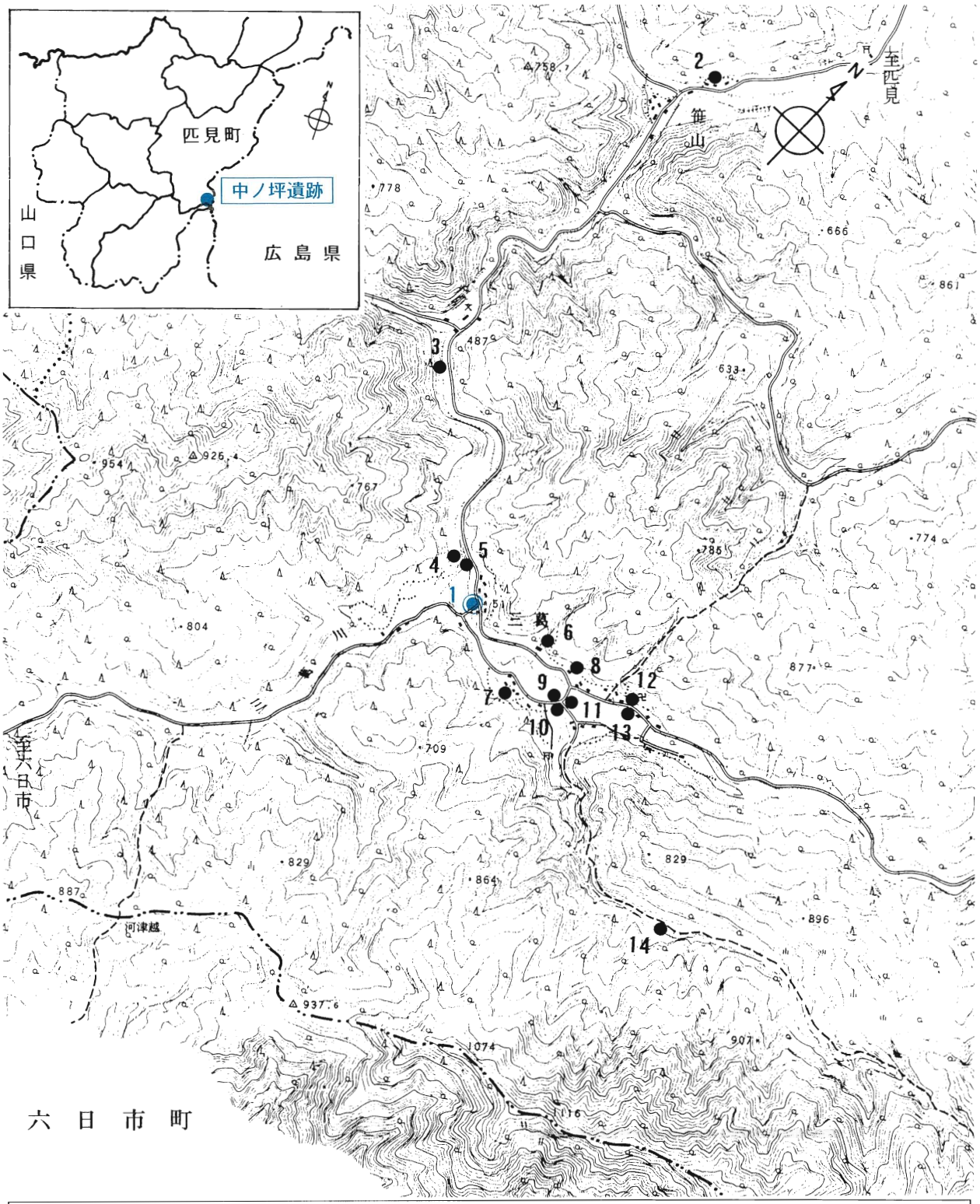
今回，調査対象地とした中ノ坪遺跡は，その本町の南端部にあたる三葛地区に所在する。該当地区は，県内最高峰の額々山（1.279m）をはじめとして，安蔵寺山（1.263m）・赤谷山（1.181m）・大神ケ嶽（1.170m）といった高位な山岳に４周された典型的な山間僻地にある。一方，当域を貫流する紙祖川は，南東約４㎞に屹立する標高1.300mの後冠山に源を発し，積木谷川や三葛川などの河谷を集流し，狭小な河岸段丘を形成しながら北西流しているのである。しかしその紙祖川も，三葛川との相会地である本遺跡で北に転じて，町の中央部へと流下するといった流路を辿っている。

このような山間地のため，年間平均気温は13℃余りと低く，降水量も2.500㎜と多く，また多雪地域でもある。そして４周する高峻な山地には温帯林を主体とするナラ林におおわれているが，1.000m内外の山地にはブナ林も植生し，一方，低位の河川沿いにはカシ・ツバキなどの照葉樹も混生する。このような樹林帯には，堅果・根茎類などの豊富な植生下にあるといえ，それを主食とする小中動物が数多く繁茂し，また河川などには鮭鱒属のゴギ・ヤマメといった冷水魚も生息している。このような動物たちが生態系を維持してきた背景には，落葉紅葉樹が広がり，いまだにその豊かな自然が残されているからにほかならないと考える。

第２節　歴史的環境

本地区の歴史は，数年前から行われている圃場整備事業に伴った発掘調査などから，原始・古代の歴史も明らかになりつつある。例えば，本遺跡の上流にあたる２川の相会地周辺には，縄文前期と想定される僅少の土器片・石器剥片が出土した門田遺跡があり，また縄文晩期と想定される清左衛門田遺跡，殿屋敷遺跡（中世期居館跡と複合）のほか，須恵器出土地の新井屋畑遺跡などが分布している。一方，小連坦地の下流にあたる小郷崎地区の本遺跡の周辺においては，平安時代の蓬莱山文鏡が出土した森谷遺跡があり，その対岸域は陣ケ原と呼称され，中世期の古戦場（吉見氏と益田氏の争端地）と伝承される周知の遺跡が存在している（図１）。そしてその周辺には該当期のものと思われる墓石が，争奪地としての戦国期を物語っているかのように点在しているのである。

（栗田　美文）



凡　　例

1	中ノ坪遺跡	2	笹山寺敷跡	3	中ノ原遺跡	4	陣ケ原古戦場
5	森谷遺跡	6	妙殿の宝篋印塔	7	新井屋畑遺跡	8	土井跡
9	九郎三郎田遺跡	10	殿屋敷遺跡	11	清左衛門田遺跡	12	妙玄寺跡
13	門田遺跡	14	木地屋墓				

図１　遺跡位置と周辺の周知遺跡

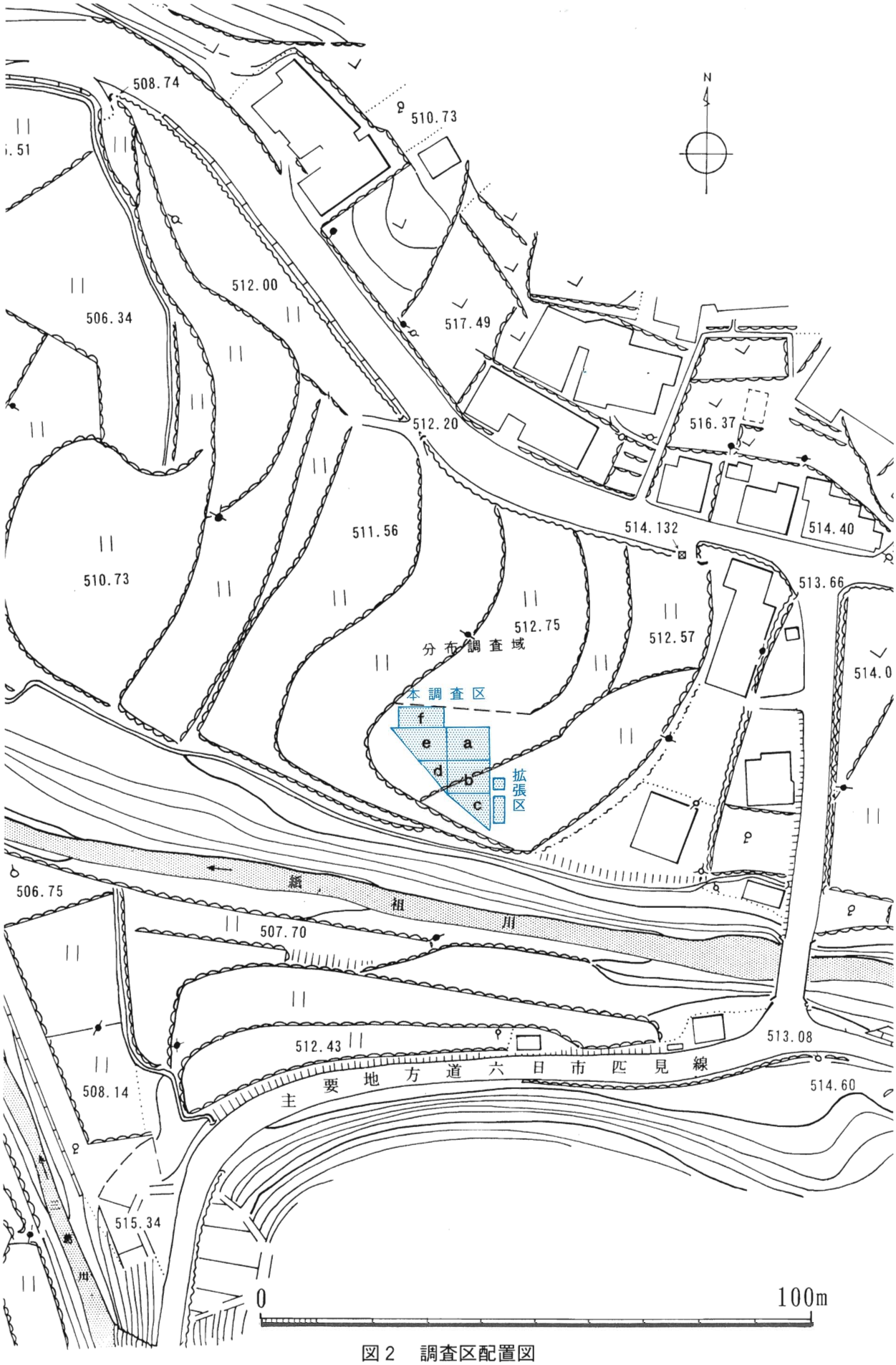

508.74
510.73
N
512.00
506.34
517.49
512.20
516.37
511.56
514.132
514.40
510.73
513.66
512.75
512.57
分布調査域
514.0
本調査区
f
e
a
d
b
c
拡張区
506.75
紙
祖
川
507.70
512.43
513.08
主要地方道六日市匹見線
508.14
514.60
515.34
0
100m

図２　調査区配置図

第3章　調 査 の 概 要

第1節　調査地点域と調査区設定

1．調査地点域

遺跡は，島根県美濃郡匹見町大字紙祖ロ164番地ほかに所在し，その地点を中ノ坪と呼称されているため，その地名をもって命名した。

現地は狭長な河岸段丘が発達し、そこは水田と化されている。遺跡はその河岸段丘のうち，ほぼ中央部の紙祖川沿いに面した端部に形成され，その表面標高は約512.8mを測る地点である。また，遺跡の150m西側には東流した紙祖川本流と、南流した三葛川とが合流した相会地に当たる（図1）。

2．調査区設定

分布調査では，水田が拡がる狭長な河岸段丘面のほぼ中央部に2m×2mの方形区を5箇所設けて調査を行った。このうち段丘端部寄りの2箇所，つまり紙祖川沿いの南東側の調査区に良好な遺物包含層が認められたので，今調査ではこれを踏まえ，その地点域に設けることにしたのであった（図2）。

まず最初に，分布調査区を設けた南側の隣接する水田に，任意に東－西方向に向けて20mを測り，これを東西軸とした。そしてその東端拠点から南側へは，原段丘面が形成されていると想定される端部まで延ばすことにした。その長さは19mであって，これを磁北軸と呼ぶことにしたのである。しかし対角する南西側は，段丘部が半円状に段を成して落ち込んでいたために，東西軸の西端拠点と磁北軸の南端拠点とを，凡そ直線状に結ぶといった変則的な計測で行った（厳密にはa区とした区画の北西側を，東－西方向に8m測って実測し，それを拠点に結んでいるので異なる）。

そしてほぼ三角状を呈した調査区内を，区形に応じてa～eと称する地区名をつけ，その間には50cmのセクションベルトをもって，5つに小分割したのであった。さらにこれらの調査区は，掘削の中盤において，出土遺物の疎密性をみて，後に拡張地区も設けた。それは北側面の西半部に設けたf区と称するもの，そして磁北軸の南半部の区画外に拡張区と称するものを設け（図2），最終的には，その発掘面積は239m^2となったのである。

第2節　層序と層位

本調査地の基本的層序は，上位から1層の黒灰色粘質土（水田耕作土），2層の灰褐色砂粒土（客土），3層の黒色粘質土，4層の黄褐色粘質土，5層の砂礫層の順で堆積していた（図3）。しかし上位部の1・2層については，時前に事業者側によって削除されていたので，厳密にいうと，堆積層は3層以下ということになる。

このうち黒色粘質土の3層は，有機質腐植土の堆積層と思われ，掘削は容易であった。その層厚は10～50cmを測り、25cmばかり高位であった紙祖川側に向かって上昇ぎみに薄くなっていた。そのため遺物包含層でもある本層においては，とくに河岸端方向の南東側では，上位部に遺物が露見さ

れるといった状態であったが，その逆に山裾方向の北半側においては，中位部が多量であったという傾向がみられたのである。

４層は黄褐色粘質土で，無遺層である。その層厚は，北側では10～30cmを測って厚く堆積していたが，やや上昇する紙祖川寄りの南側に向っては尖滅していたのである。礫は余りみられないが，下位部を中心に砂質性おびていた。また本層の上面には３層から陥入する土坑が確認されたが，それは特に薄層であった南半面に偏在しており，これは遺構の構築層位というよりは、層厚の深浅差に関係しているものと捉らえられる。

５層は砂礫で，大･小の円礫が充填し、河床礫の堆積する基盤層である。遺物はみられなかったが，部分的に３層からの陥入土坑がみられ，上位層の堆積の薄い南半部において，それが顕著であった。

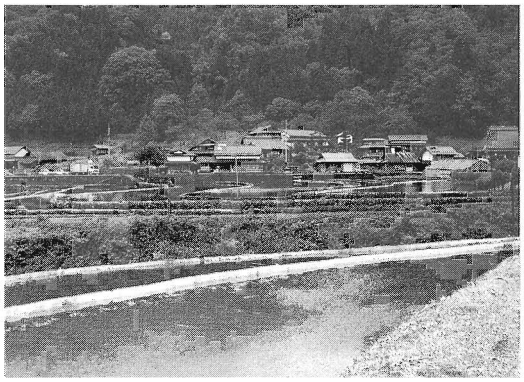
なお，隣接した北側の分布調査においては，６層黒色土として捉らえられたものは，本遺跡でいうところの４層めに層順ものであった。つまり分布調査でいう５層から上位層の橙褐色粘質土，そして黒褐色土（４層）などの耕作土・客土を除く層位は，堆積していなかったのである。これは高位であった本遺跡地点において，田地などの造成のため，深い削平が行われたということが想定できる。

第３節　遺　　構

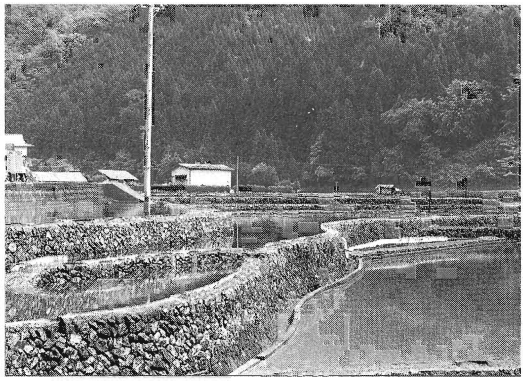
１．はじめに

本遺跡では，配石・柱穴，あるいは竪穴住居などの遺構が139基検出されている（図９）。これらの各遺構については，土坑状のものをSK，柱穴状のものをＰ，竪穴住居状のものをSIというように略号することにした。ただしSKとしたものには配石を伴ったものが殆どであったが，中には集石遺構，あるいは焼土坑（１基），配石を伴わない土坑（数基）などの，用途的目的の異なる遺構も含んでいるものの，ここでは土坑を有するという形状のみから一括的に略号することにした。そして土坑に集石状のものを伴っているものもあるが，ここではその形状から集石遺構とは呼称せず，それらを全て配石遺構として捉えたい（他に集石遺構と捉えられるものが検出されているため）。

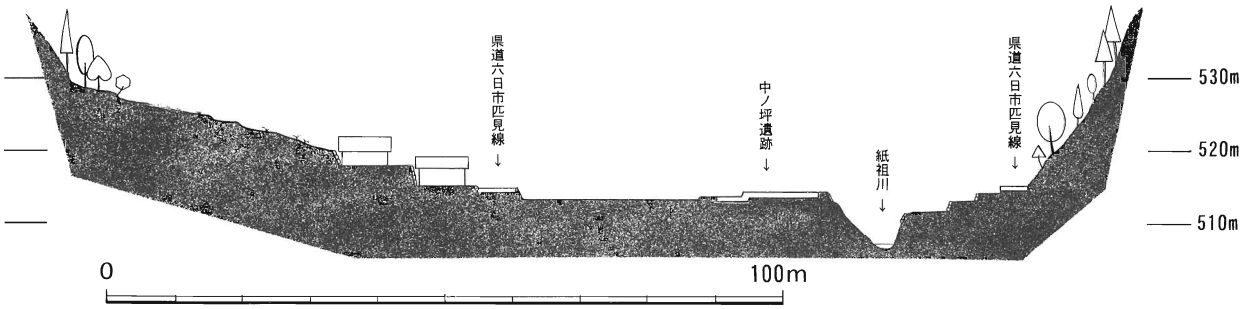
またこれらの遺構は，その表出状況からみて３層黒色土の中位部から構築されたものと想定できるもので，遺物の出土の仕方もほぼ同様の傾向を示していたのであった。とくに厚く堆積した北半部においては，中には３層範疇内のみで検出されるものもあって，遺構とみることが難しいものも存在していたのであるが，同一的な石体が，ある一定のまとまりをもっていることなどから理解できたものも存在した。ただし多半の遺構は，下位の４層に陥入して検出されているため、その坑底部などは把握できるものの，したがって構築上位部がはっきりしないのが実状であった。そして遺物をみるかぎり，そこには時期幅が捉えられるが，遺構との共伴性が把握できないものもある。これは同一層（３層）内であったことにも影響しているものと考えられる。以下，このようなことを含めてみていくことにする。

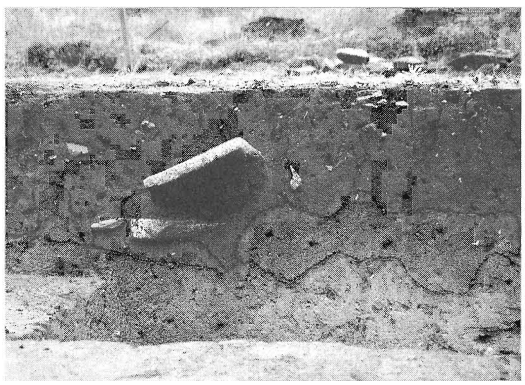


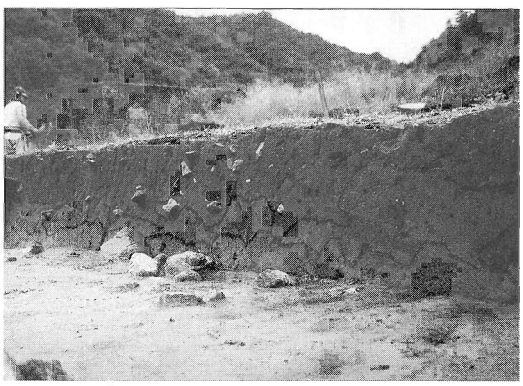
南からみた調査地点

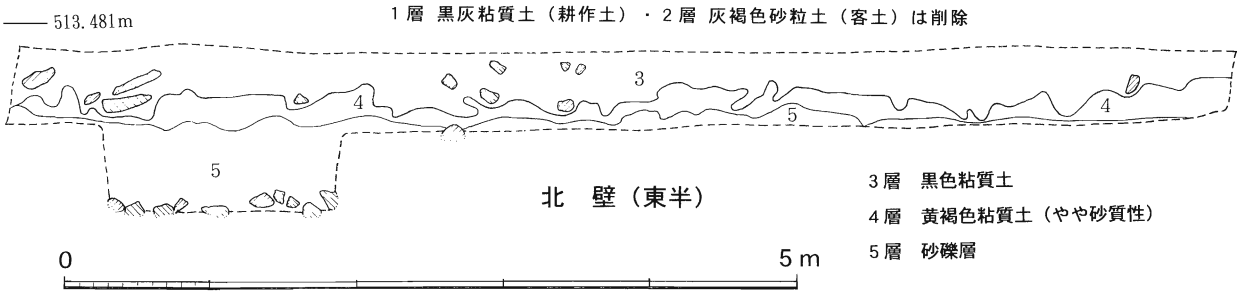


調査地点（北西から）



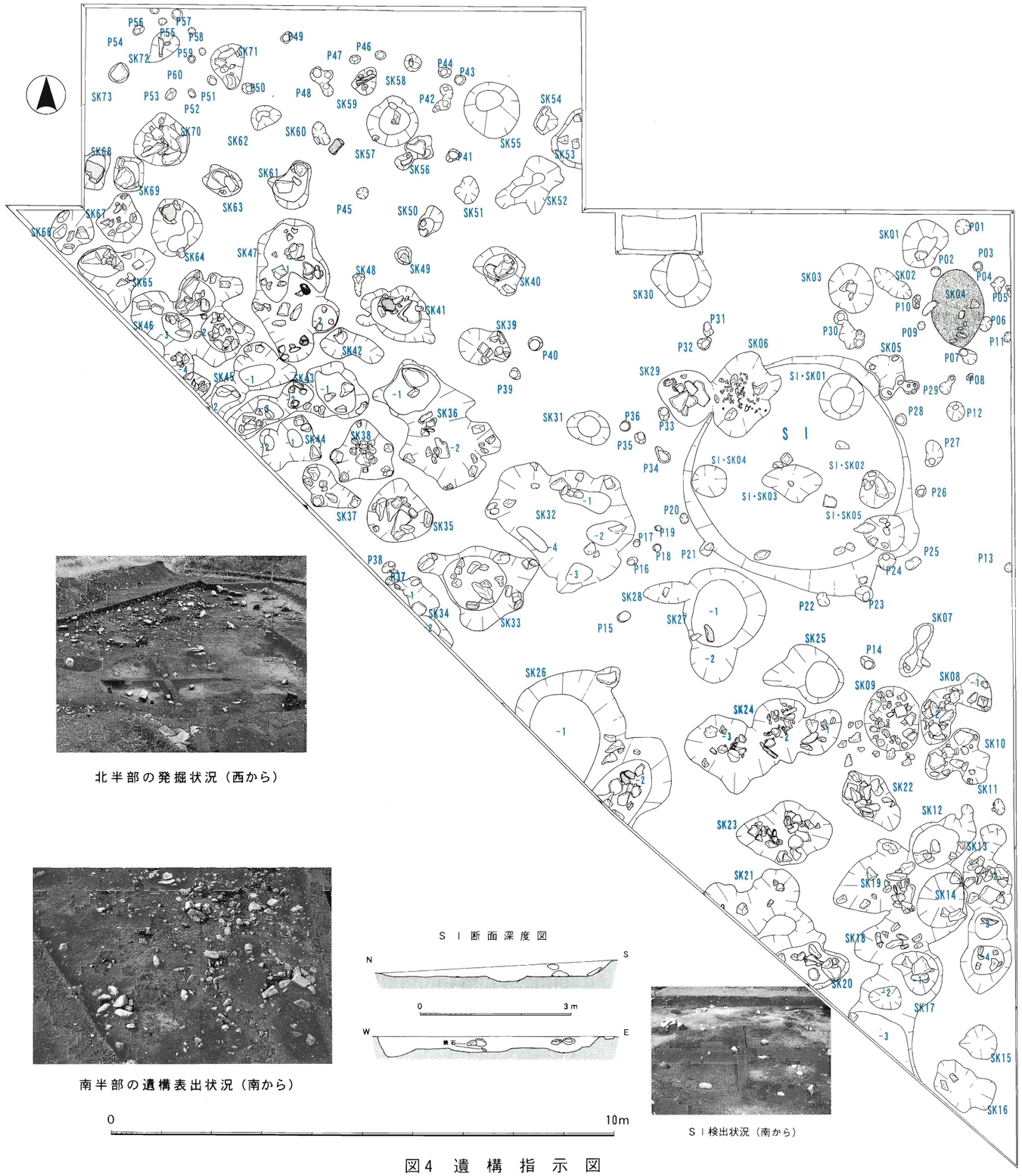






土器片・石器出土状況（3層黒色粘質土）

図3 遺跡立地と層序



北半部の発掘状況（西から）

南半部の遺構表出状況（南から）

S I 検出状況（南から）

図4 遺 構 指 示 図

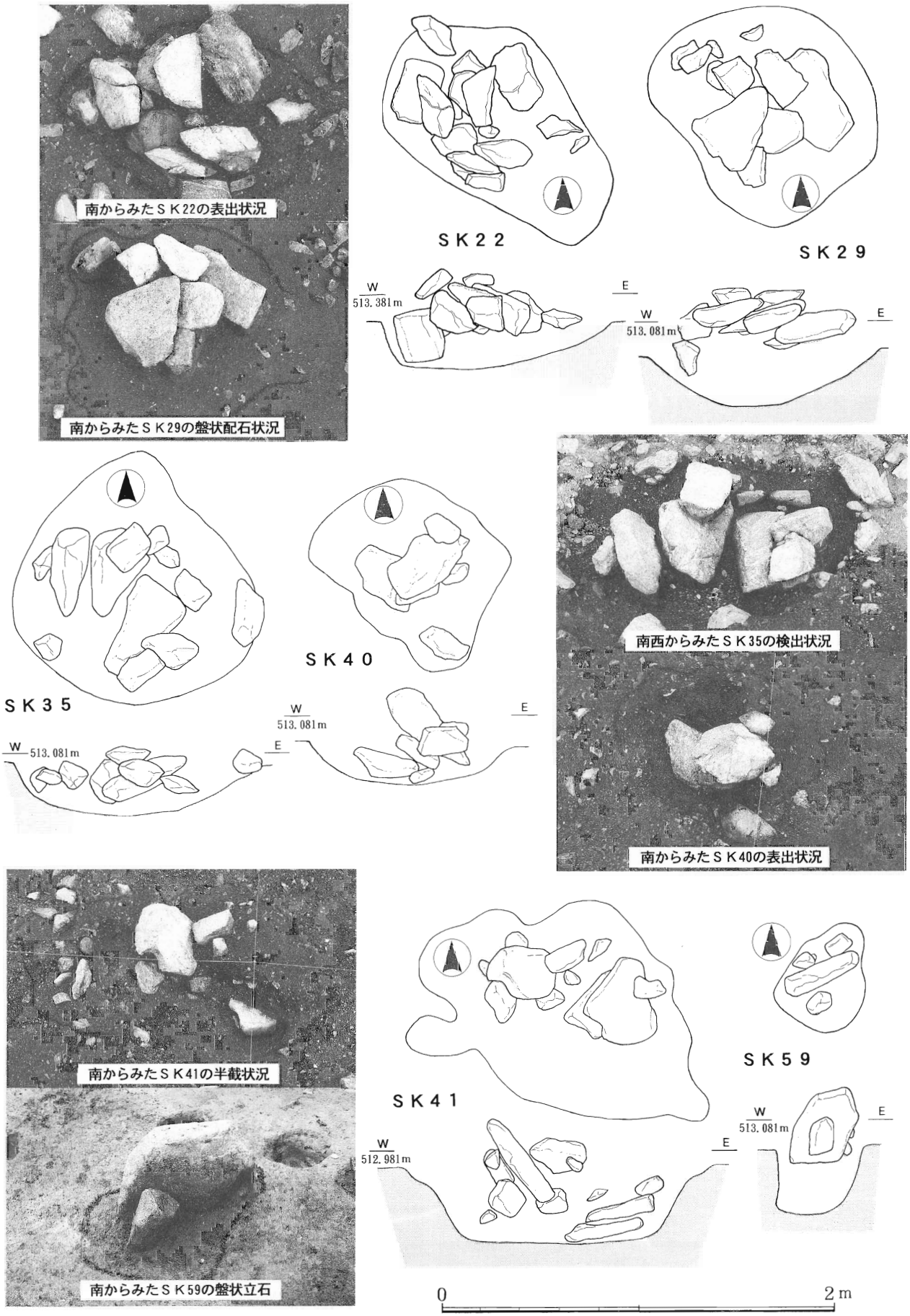
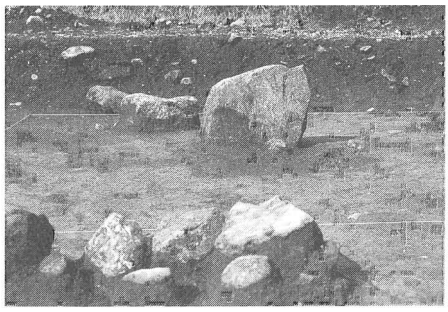
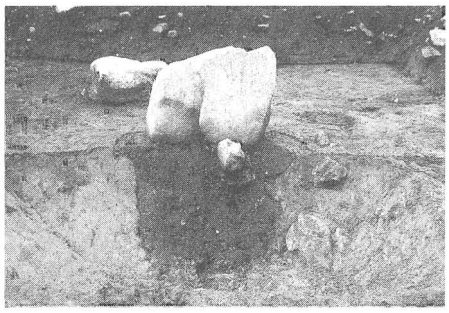


図５　遺構状況と立体図（１）

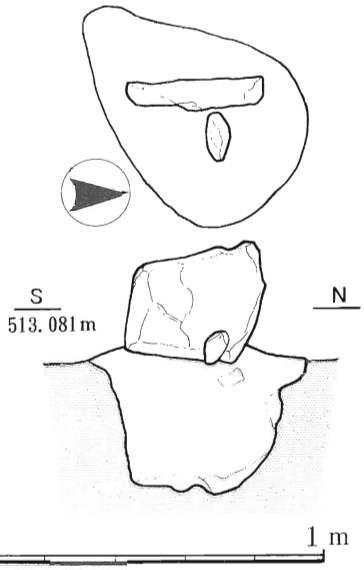
ＳＫ７２

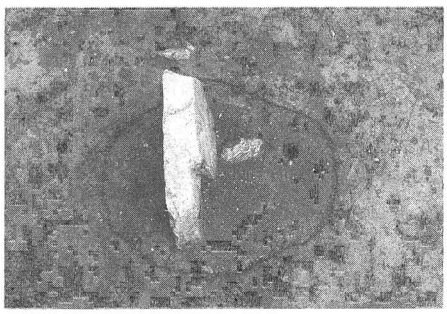


東からみた遺構表出状況

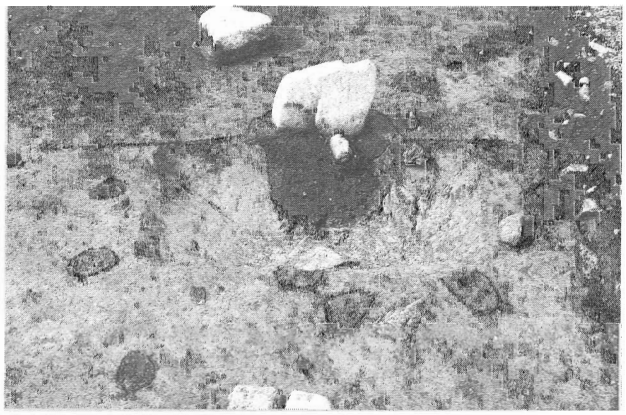


東からみた土坑陥入状況

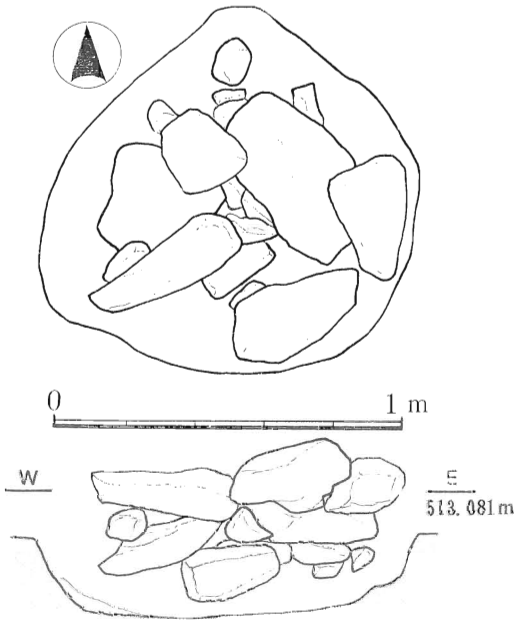




南上からみた遺構表出状況



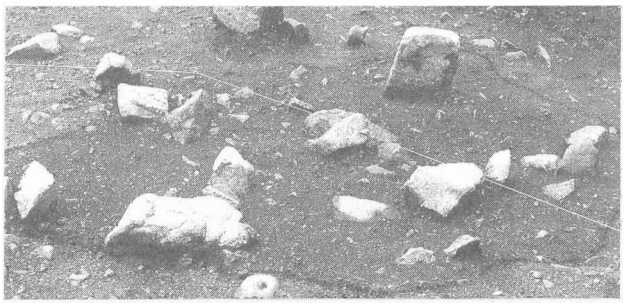
土坑周辺のピット表出状況



ＳＫ70の立体図

南からみたＳＫ69(左)とＳＫ70の表出状況

ＳＫ28の立石（東から）



ＳＫ33の立石（北東から）

図６　遺構状況と立体図（２）

2．各遺構の概要

ＳＫ　SKと略号した土坑状のものは，計数的に捉らえると78基であった（図４・遺構計測表）。しかし実質的には重複するものがあるなど，凡そ100基におよぶものが検出されている。その内訳は，配石を伴う土坑87基，無配石の土坑11基，焼土塊が充填する土坑１基，地床炉と捉らえられるもの１基，礫集石（集石炉）を伴う土坑１基などであった。

このうち配石遺構と呼称するものは，形状的には円形を基本とするものと想定される。それは複合を免れているSK09・SK35（図５）・SK70（図６）などに典型的なパターンとして捉らえれられる。それらは径１～1.3m内外を測る円状のものであって，その坑形は椀状を呈するものであったと理解される。そして上位部の坑域には，長径で20～50cm余りを測る数10石の河原石をもって，集石状に配されていたのである。他の配石遺構も，そうした基本的形態であったものと想定され，数基のものが複合する遺構においても，同形のパターンのもとに構築されたものであることが，坑形からも看取できるのである。

なお，これらの配石遺構には，縄文前期の初頭を中心とする土器片などの遺物を伴っていたものの，いずれも細片であって，そこに意図的な行為が介在していたかについては明らかにできなかった。ただしSK35・SK36・SK38・SK44，SK45（無配石）の５基では人・獣のものかは明確ではないものの，骨片そして炭化物が検出されている。またSK26の坑底部からは焼火し，損壊した玦状耳飾の１点が出土している（図17）。

また，これらの配石遺構の19基において，立石を伴っており（図３），そして多くは盤状を呈したものが顕在していた。とくにこの盤状石については，集石状の配石にも多用されているものも検出されており，それはSK29・SK41（図６）では顕著に認識できたのであった。そして中でも注意されるのは，SK59（図５）・SK72（図６）などのように，単独で立石しているものであったのである。これらは意図的に立てられたらしく，盤状石の下端部には数個の礫石をもって補強していたのであった。そのうちSK59の補強石の１体は焼石であり，４層に陥入する土坑は，いずれも下方に用途的目的があるかのように，深く掘り込まれていたのである（図５・図６）。その坑形は円錐形を呈していて，SK72では細片の刺突文系土器と想定されるものが共伴した。そして同形態ではなかったかと想定されるものが，SK60に接近した地点の盤状石や，またSK68・SK69・SK71・SK73などの盤状石にも，傾立した様態のものではあるものの検出されているのである。いずれにしても，これらの北西端域に偏在する単独的盤状立石といえるものは，前述した集石状の配石遺構のものとは形態において異なることから，別機能をもったものではないか，とSK72に周辺するピット群などの特異性から想像できる（図６）。

Ｐ　ピット（柱穴状）と位置付けたものは，凡そ径30cm前後以下のものを呼称することにした。ただし重複するものもあり，中には数的大きさからSKに仕別したものなどがあって，そこには統一的な仕別けはできなかった。

その柱穴状のピットとしたものは，３・４層との層界面に３層の黒色土を陥入して表出したもので，60穴が検出されている（図４・９）。それらは主に北側に偏在して分布しており，そのうちでも北東側のSI（竪穴住居址）周辺，そして北西側の配石群を伴った２地点域に，１つのまとまりと

して捉らえられたのである。しかし各ピットについては，共伴遺物が極めて少ないことから時期については明確ではなく，また北西側の特に盤状石を伴った周辺のピット群の用途的目的なども理解できなかったのである。そうした中でも特にSK72のように，その盤状立石をとり囲んで円並するピット（図６）は，意味深いものではないかと思われたのである。またSK04の焼土土坑を楕円状に周囲する小ピットも気になったのである。いずれにしても，北東側のSI周辺のピット群は日常生活空間に伴うもの，一方の北西側の配石中に存在するものは，非日常空間に伴うものではないかと想像する。

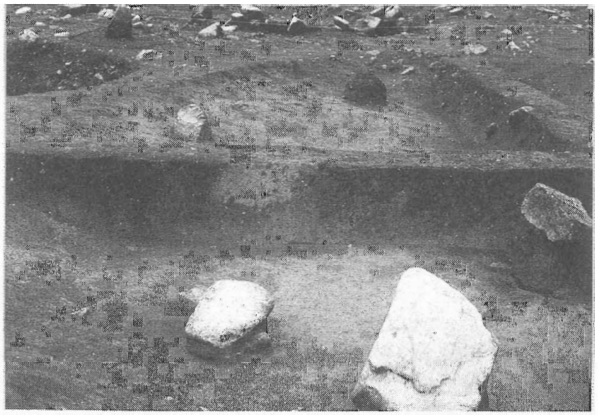
ＳＩ　北東側に検出されたSIとしたものは，短径約4.5m・長径約4.8mを測って，ほぼ円形を呈したもの（図４・図７）。本坑には３層黒色土が陥入しており，坑上には部分的に４層の黄褐色粘質土がブロック状に嵌入していたのである。また坑高は10～28cmを測り，北辺側は薄く，それに対して南辺側は厚く，円周する坑壁は全体的に緩やかであった。

しかしこのSIは，３・４層の層界面に表出したものであって，大半の遺物が３層中位部を中心に出土しているため，その部位から構築されていたと想定される。したがって計数的に捉らえたものが，原遺構を現出しているものとはいえないのである。そして本坑内には轟式系の土器片を中心に，38点の石器剥片などを伴い，５基の土坑も検出された。ただし，この５坑が本坑に全て伴うものとはいえず，SI－SK02・SI－SK05では配石を伴っていた。そしてSI－SK03・SI－SK04では，無配石で炭化物が出土し，前者は焼石を伴うなど形態的に差異がみられたのである。
だたSK03は，本坑に伴う地床炉であったものとみている。

集石・焼土遺構　本遺構は，他の土坑とは形態的に異なるので別項を設けることにし，前者はSK06，後者はSK04を差すものである（図７）。このうち前者は短径約1.2m・長径約1.8mを測って坑形は不整形で，また坑高は６cmと浅かった。坑内には３，４個の20～30cmを測る河原石の赤褐色した焼石が散在し，その中志部には被熱による割石（３～10cm）が数10個確認されたのである。そして坑内には炭化物も多く検出されたが，土器・石器類の遺物は出土していない。したがって時期的には押さえることができなかったが，それらの被熱による砕破した小礫の検出状況などから，石焼き調理などに通じるところの集石土坑といえるものであろう。ただし，SI遺構によって上位部が削平されたらしく，全体的に坑高はなく，礫石も少なかったのである。

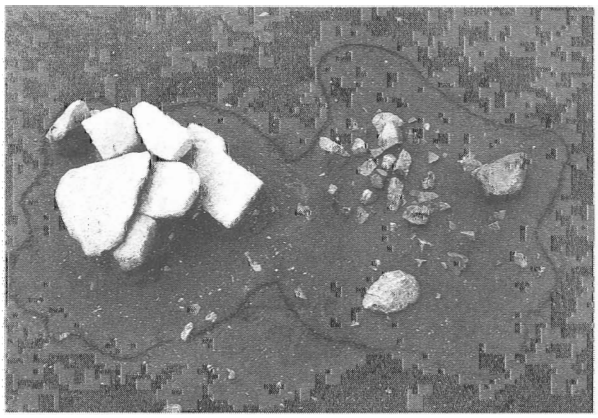
一方，後者のSK04は，北東端部辺に検出された焼土・炭化物塊の土坑（図７）で，その短径1.06m・長径1.58m測って楕円形のものであった。そしてその構築部は，３層中位部の標高512.78mに表出し，その焼土などの堆積高約24cmを測り，坑底部は皿状を呈して４層に陥入していた。また焼土や炭化物が堆積した坑内には，数片の押引文系の土器など（焼石）も伴っていたことによって，本坑をSI遺構と同時期のものであること，そして屋外炉であったとみておきたい。

（渡辺　友千代）

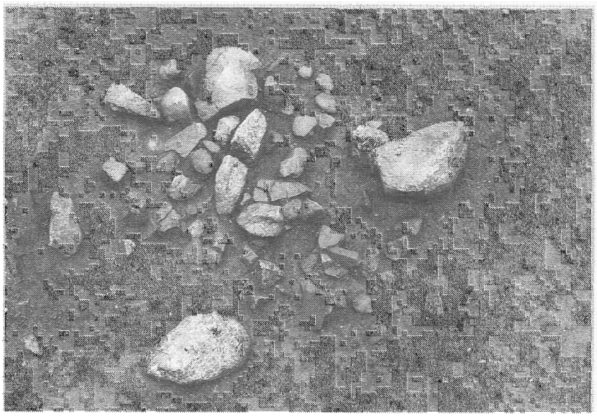


ＳＩに陥入した３層黒色粘質土（東から）

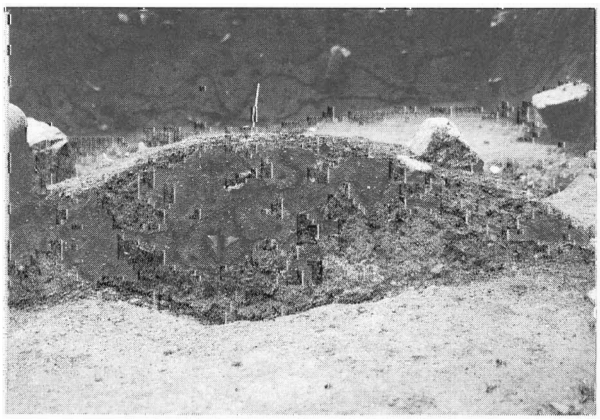
東からみたＳＩなどの遺構検出状況



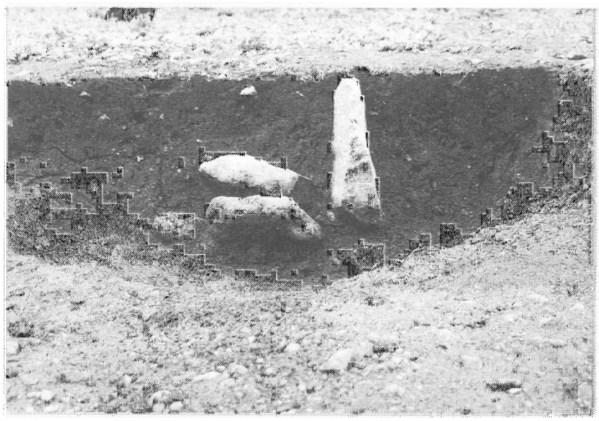
南からみたＳＫ29(左)とＳＫ06の表出状況



南からみたＳＫ06(集石炉)の検出状況



ＳＫ04に堆積した炭化物・焼土（南から）



拡張区の東壁に表出した配石

東からみた北西端部の配石状況

南西半の完掘状況（北西から）

図７　その他の遺構と検出状況

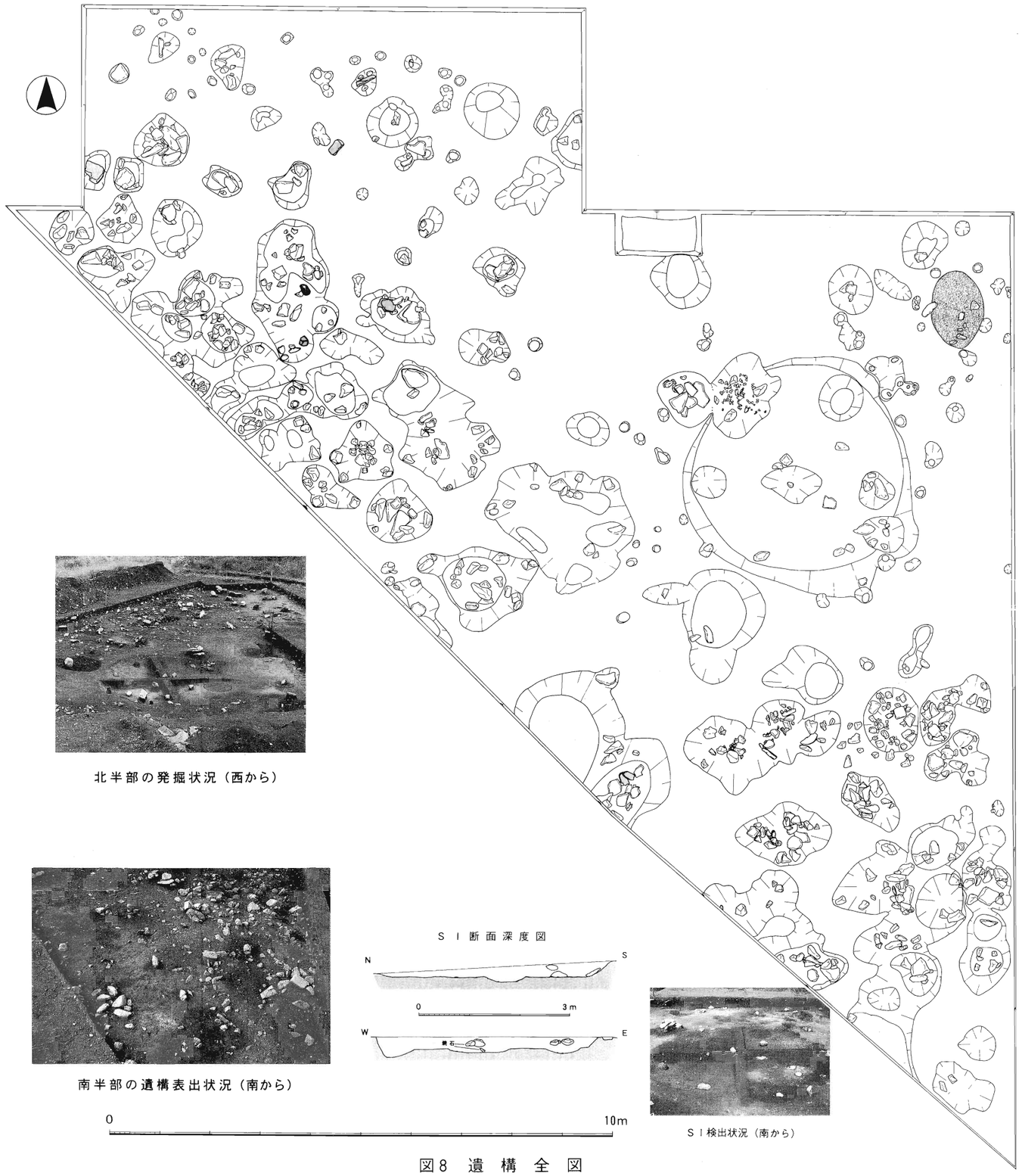

北半部の発掘状況（西から）
南半部の遺構表出状況（南から）
S I 断面深度図
N
S
0
3m
W
E
黄石
S I 検出状況（南から）
0
10m

図8 遺 構 全 図

道構	短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	層界面標高(m)	摘要
P01	27.0	30.0	9.0	512.791	
P02	19.0	22.0	9.0	512.761	
P03	18.0	20.0	7.5	512.806	
P04	19.0	33.0	17.0	512.831	
P05	—	—	10.0	512.831	
P06	24.0	29.0	11.0	512.851	
P07	22.0	38.0	22.0	512.851	
P08	11.0	17.0	9.0	512.861	
P09	14.0	16.0	—	512.821	
P10	13.0	27.0	17.0	512.811	
P11	—	21.0	6.0	512.861	
P12	36.0	39.0	12.0	512.891	
P13	15.0	—		512.971	石器剥片4点・黒耀石(白)1点・上器2点・炭化物多量
P14	22.0	32.0	14.0	513.141	
P15	19.0	27.0	12.0	513.121	
P16	16.0	22.0	5.0	512.981	
P17	14.0	18.0	6.0	512.961	
P18	13.0	14.0	19.0	512.961	
P19	9.0	13.0	16.0	512.961	
P20	14.0	22.0	11.0	512.961	
P21	25.0	36.0	—	512.981	
P22	17.0	30.0	7.0	513.041	
P23	35.0	37.0	13.0	513.071	
P24	36.0	37.0	29.0	513.081	
P25	19.0	33.0	27.0	513.081	
P26	19.0	22.0	5.0	512.941	
P27	34.0	53.0	11.0	512.921	
P28	22.0	24.0	19.0	512.871	
P29	16.0	44.0	13.0	512.871	
P30	35.0	83.0	18.0	512.791	
P31	17.0	30.0	11.0	512.871	
P32	19.0	30.0	7.0	512.861	
P33	21.0	28.0	12.0	512.941	
P34	19.0	39.0	9.0	512.931	
P35	20.0	26.0	21.0	512.941	
P36	20.0	24.0	9.0	512.941	
P37	14.0	18.0	20.0	513.041	
P38	18.0	30.0	10.0	513.041	
P39	20.0	26.0	16.0	513.021	轟系土器1点
P40	27.0	29.0	16.0	512.991	
P41	22.0	29.0	8.0	512.931	
P42	16.0	61.0	15.0	512.931	
P43	20.0	21.0	9.0	512.911	
P44	19.0	26.0	11.0	512.911	
P45	22.0	26.0	—	512.951	
P46	17.0	20.0	14.0	512.931	
P47	18.0	20.0	13.5	512.926	
P48	31.0	65.0	16.0	512.931	
P49	14.0	24.0	10.5	512.956	
P50	20.0	27.0	15.0	512.941	
P51	14.0	19.0	—	512.961	
P52	12.0	18.0	—	512.961	
P53	18.0	25.0	—	512.961	
P54	17.0	25.0	—	512.941	
P55	14.0	16.0	—	512.941	
P56	—	18.0	—	512.946	
P57	19.0	25.0	—	512.946	
P58	14.0	15.0	—	512.946	
P59	13.0	14.0	—	512.951	
P60	17.0	18.0	—	512.956	
SK01	74.0	99.0	14.0	512.781	石器剥片1点
SK02	32.0	90.0	15.0	512.811	無配石
SK03	90.0	100.0	26.0	512.841	石器剥片4点・押引文系土器1点
SK04	106.0	158.0	24.0	512.841	押引文系土器など4点 地床炉・焼石（2体）・炭化物多量
SK05	52.0	116.0	23.0	512.851	無配石・ピット5穴
SK06	121.0	178.0	6.0	512.831	集石炉・焼石・炭化物多量
SK07	25.0	118.0	4.0	513.071	押引文系土器など2点
SK08-1	67.0	79.0	20.0	513.181	立石（1体）
SK08-2	68.0	122.0	18.0	513.231	
SK09	106.0	131.0	37.0	513.211	盤状石（1体） 上面から石器剥片7点・轟系上器など6点 下面から石器剥片6点・凹石1点・轟系上器など6点 炭化物少量
SK10	64.0	131.0	22.0	513.221	上器片1点
SK11	20.0	32.0	15.0	513.261	
SK12	80.0	154.0	48.0	513.281	盤状石（1体）・上面から石器剥片6点・石核2点 石鏃1点・石匙1点・上器44点 下面から石器剥片1点・凹石1点・押引文系上器など11点
SK13-1	49.0	56.0	13.0	513.281	
SK13-2	86.0	126.0	11.0	513.301	盤状石（1体）
SK13-3	76.0	80.0	34.0	513.351	盤状立石（1体）　石器剥片9点
SK13-4	90.0	110.0	26.0	513.371	隆帯文、押引文系上器など41点
SK14	96.0	141.0	49.0	513.281	盤状石（1体） 石器剥片1点・黒耀石（白）1点・石鏃1点・上器5点
SK15	68.0	74.0	7.0	513.401	無配石
SK16	70.0	132.0	10.5	513.416	
SK17-1	90.0	131.0	53.0	513.391	盤状石(1体)　石器剥片11点
SK17-2	62.0	123.0	34.0	513.411	石核2点・押引文系土器など10点
SK17-3	—	—	46.0	513.411	
SK18	86.0	146.0	16.0	513.401	石器剥片2点・上器2点
SK19	113.0	177.0	22.0	513.371	立石（1体） 上面から石器剥片2点・押引文系上器など4点
SK20	—	—	51.0	513.401	盤状石（2体）・上面から石器剥片3点・上器3点 下面から石器剥片3点・押引文系土器など2点
SK21-1	88.0	104.0	14.0	513.341	上器3点
SK21-2	—	—	11.0	513.341	
SK22	76.0	144.0	26.0	513.261	盤状石（2体）
SK23	106.0	194.0	45.0	513.321	盤状石（2体）・立石（2体） 石器剥片2点・凹石1点・押引文系上器など23点 下面から押引文系上器片など7点
SK24-1	72.0	107.0	13.0	513.251	盤状石（2体）
SK24-2	102.0	133.0	22.5	513.246	盤状立石（1体）・石器剥片3点・上器9点
SK24-3	118.0	165.0	35.0	513.241	石器剥片7点・石核2点・石錘1点・上器36点
SK25	90.0	162.0	26.0	513.131	無配石・石器剥片6点 刺突文、押引文系上器など196点
SK26-1	—	—	56.0	513.131	石器剥片22点・石錘1点・石鏃2点・水晶1点 玦耳飾1点・轟系上器など38点
SK26-2	62.0	—	51.0	513.241	立石（1体）・盤状立石（1体）・盤状石（3体） 石器剥片13点・曽畑系上器など22点 下面から石器剥片57点・石核1点・黒耀石(白)3点 石鏃4点・黒耀石製石鏃(黒)1点・チャート1点・上器21点
SK27-1	164.0	172.0	66.0	513.111	盤状立石(1体) 石器剥片86点・石核11点・黒耀石（白）5点 石鏃7点・石匙1点・スクレイパー1点・上器37点
SK27-2	80.0	90.0	36.0	513.201	SK27から剥片1点・黒耀石（白）1点・上器2点
SK28	41.0	92.0	23.0	513.101	盤状立石（1体） 石器剥片2点・スクレイパー1点 轟系、刺突文系、押引文系上器など4点
SK29	104.0	118.0	28.0	512.921	盤状石（3体） 上面から石器剥片25点・石匙1点・上器33点・炭化物少量 下面から石器剥片9点・上器8点
SK30	92.0	—	29.0	512.881	無配石・石器剥片9点 石鏃1点・打製石斧1点・押引文系上器など37点
SK31	61.0	88.0	13.5	512.996	無配石・黒耀石（白）1点
SK32-1	88.0	168.0	61.0	513.031	
SK32-2	96.0	110.0	49.0	513.031	石器剥片14点・上器38点
SK32-3	61.0	139.0	31.0	513.101	石器剥片1点・黒耀石（黒）1点・上器2点
SK32-4	126.0	231.0	28.0	513.051	上面から石器剥片3点・上器3点 下面から加工剥片5点・上器5点
SK33	146.0	240.0	41.0	513.091	盤状立石（1体） 上面から石器剥片3点・黒耀石（白）1点・上器9点
SK34-1	19.0	102.0	14.0	513.051	盤状立石（1体）・盤状石（1体）
SK34-2	—	—	25.0	513.051	下面から石器剥片1点・上器4点
SK35	108.0	130.0	25.5	513.046	石器剥片2点・上器4点・骨片少量
SK36-1	107.0	200.0	20.5	513.046	石器剥片37点・黒耀石（黒）1点・石錐3点 磨石1点・上器31点・炭化物少量・骨片少量
SK36-2	134.0	204.0	65.0	513.031	石器剥片49点・黒耀石（黒）1点・石鏃9点 打製石斧1点・押引文系、船元系轟系上器など152点 炭化物少量・骨片少量
SK37	56.0	130.0	11.0	513.031	
SK38	102.0	126.0	43.0	513.041	石器剥片13点・石核1点・石鏃1点 轟系、曽畑系、押引文系上器など144点 炭化物少量・骨片少量
SK39	62.0	104.0	12.0	513.041	
SK40	74.0	104.0	12.0	512.951	盤状石（1体） 石器剥片11点・轟系上器など17点・炭化物少量
SK41	88.0	170.0	37.0	512.981	盤状立石(1体)・盤状石(2体)・上面から石器剥片15点 石核2点・凹石1点・轟系、押引文系上器など63点 下面から石器剥片4点・轟系上器など5点・炭化物少量
SK42	41.0	128.0	—	513.021	
SK43-1	87.0	140.0	23.0	513.031	SK43上面から石器剥片1点・上器6点
SK43-2	61.0	76.0	26.0	513.021	
SK43-3	59.0	—	19.0	513.001	石器剥片1点・黒耀石（黒）1点
SK44-1	62.0	107.0	—	513.021	石器剥片2点・上器3点・炭化物少量・骨片少量
SK44-2	44.0	—	—	513.021	下面から上器2点
SK45-1	80.0	127.0	19.0	512.991	無配石・上面から曽畑系上器1点 SK45-1から石器剥片11点・石錘1点・黒耀石（白)1点 石鏃2点・凹石1点・炭化物少量・骨片少量 船元系、刺突文系上器など17点
SK45-2	47.0	—	15.0	512.991	石器剥片1点・上器1点
SK46-1	62.0	142.0	21.0	513.021	
SK46-2	96.0	122.0	33.0	513.001	石器剥片3点・上器1点
SK46-3	78.0	140.0	15.0	513.011	
SK46-4	—	—	20.0	512.991	
SK47-1	117.0	172.0	43.0	512.971	立石（1体）・石器剥片8点・石核1点・石鏃1点 黒耀石(白)1点・磨製石斧1点・轟系上器など25点
SK47-2	81.0	155.0	12.0	513.011	立石（1体）・押引文系、轟系上器など2点
SK48	18.0	44.0	21.0	512.981	上器3点
SK49	32.0	37.0	17.5	512.966	上器1点
SK50	42.0	63.0	34.0	512.951	石器剥片1点・上器1点
SK51	38.0	56.0	12.5	512.963	石器剥片1点・上器1点
SK52	68.0	149.0	24.0	512.911	石器剥片3点・轟系上器など12点
SK53	—	—	12.0	512.901	
SK54	42.0	56.0	20.0	512.921	
SK55	108.0	110.0	20.0	512.921	無配石 石器剥片16点・黒耀石製石鏃（黒・白）各1点 石鏃1点・磨石1点・押引文系上器など13点
SK56	39.0	91.0	18.0	512.913	盤状石（1体）
SK57	100.0	105.0	12.0	512.941	石器剥片5点・黒耀石（白）1点・土器1点
SK58	32.0	34.0	12.0	512.931	
SK59	36.0	58.0	—	512.931	盤状立石（1体）・石器剥片3点・土器5点・焼石
SK60	26.0	49.0	21.0	512.961	道の横(南東側)に盤状立石（1体）・焼石
SK61	64.0	100.0	15.5	512.976	盤状石（1体）・石器剥片3点・土器11点
SK62	44.0	62.0	11.0	512.961	無配石・石器剥片1点・土器1点
SK63	52.0	80.0	14.5	512.976	上面から石器剥片2点・凹石1点・轟系上器など6点
SK64	104.0	116.0	13.0	512.991	盤状立石（1体）・上器1点
SK65	81.0	156.0	24.0	512.991	石器剥片1点・上器1点
SK66	78.0	—	26.0	512.961	
SK67	81.0	98.0	15.0	512.971	上器1点
SK68	—	80.0	8.5	512.966	盤状立石（1体）・上面から石器剥片1点・轟系上器1点
SK69	61.0	78.0	13.5	512.966	盤状石（1体）・里木式上器1点
SK70	102.0	121.0	19.0	512.961	盤状石（1体）・上面から轟系上器など2点 SK70から石器剥片2点・轟系上器など15点・
SK71	61.0	91.0	1.0	512.951	
SK72	47.0	74.0	—	513.041	盤状立石(1体)・石器剥片3点・刺突文系上器など33点
SK73	39.0	43.0	42.0	512.961	盤状石(1体)
S1	454.0	480.0	25.0	512.921	南東端(P23北側)に立石(1体) 石器剥片38点・轟系、押引文系上器など67点
SI・SK01	86.0	92.0	8.0	512.741	無配石・石器剥片1点・押引文系上器2点
SI・SK02	59.0	78.0	11.0	512.711	盤状石(1体)・上面から黒耀石(白)1点・曽畑系上器4片
SI・SK03	60.0	121.0	10.0	512.691	無配石・焼石・炭化物
SI・SK04	62.0	71.0	29.0	512.801	無配石・炭化物
SI・SK05	70.0	89.0	10.0	512.741	盤状石（1体） 石器剥片52点・石核3点・黒耀石（黒）2点 石鏃5点・石匙1点・石錐1点・スクレイパー1点 尖頭器1点・磨石1点・轟系上器など72点 下面から剥片1点・打製石斧1点

現地表面標高　513.681m　　（－は不明を示す）

図9　遺構計測表

第4章　出　土　遺　物

第1節　は　じ　め　に

本町における縄文時代前期の土器は，新槇原遺跡や田中ノ尻遺跡の２遺跡で出土している。この２遺跡は，道川地区に所在し，しかも匹見川を挟んで対峙するという近接にあって，いずれも３層を中心とした暗褐色系の層位に出土しており，該期における同一文化域であったことが窺われるものであった。

その両遺跡での縄文前期土器は，轟Ｂ式系のものが最も多く，新槇原遺跡では加えて月崎下層，羽島下層，彦崎ＺＩ式系のものなども散見されているが，轟式に次いで多いのは条痕文系の土器である。また配石を伴った田中ノ尻遺跡では，滑石を混入させた曽畑式土器も数片出土している。そのほか顕著な縄文前期を包含した遺跡は見当たらないが，三葛地区の門田遺跡で同時期と想定される細片が数片，そして江田地区の中曽根で１片の轟Ｂ式土器が採集されているという程度にすぎない。なお，町外の近隣でも縄文前期を中心とした遺跡は顕著ではないが，ただ隣接する那賀郡金城町の岩塚Ⅱ遺跡では，比定に値するものも散見されているものの，一方で検討すべき問題もあることから，今後関連付けていく必要があろうと考えている。

今回の発掘調査中に採集，あるいは出土した遺物は総数約10600点余りで，うち土器片5300点，石器類5300点と２分する。このうち土器片については，5000点余りが本調査区における出土で得られたものであって，そのほか200点余りは拡張区，そして100点余りは廃土および調査区周辺で採集したものであった。これらをさらに細く本調査区でみると，最も多く出土したのが竪穴住居域のａ地区で，凡そ900点近いものであった。そして800数点のｅ地区，そしてｆ地区の600数点とつづき，つまり山側寄りの北側に多出するという傾向がみられたのであった。このことは河岸端の南側は墓域であったために少なく，また北側は竪穴住居址などの遺構にみられるように，そこは生活域であったことを示唆しているようにも思える。また有文土器からみるならば，轟式系隆帯文が４割，押引文系（刺突文系を含む）３割，大歳山系（里木・船元系としたものを含む）２割、そして曽畑系と凡そつづく。ただし，多量であった条痕系のものについては，細分するようなことはしなかった。

現地調査から短期間で，これらの多量の遺物を全て報告することは，とくに時間的な制約の上から無理である。したがって形態的に理解できやすい少量の口縁部を中心に捉えることにした。と，はいっても中には口縁部以外で，その特徴を把握できる有文も取り上げているが，全体的には図版を中心にするものとし，しかも量的に押えた上の概説形式をとっているので，そこには遺跡の性格や特徴付けが浮彫りになっていないことを危惧する。なお，中でも特に注意される土器についてのみ，拓本および断面を図示することに止め，今後の資するものとした。

第2節　実　測　土　器

1．掲載方法

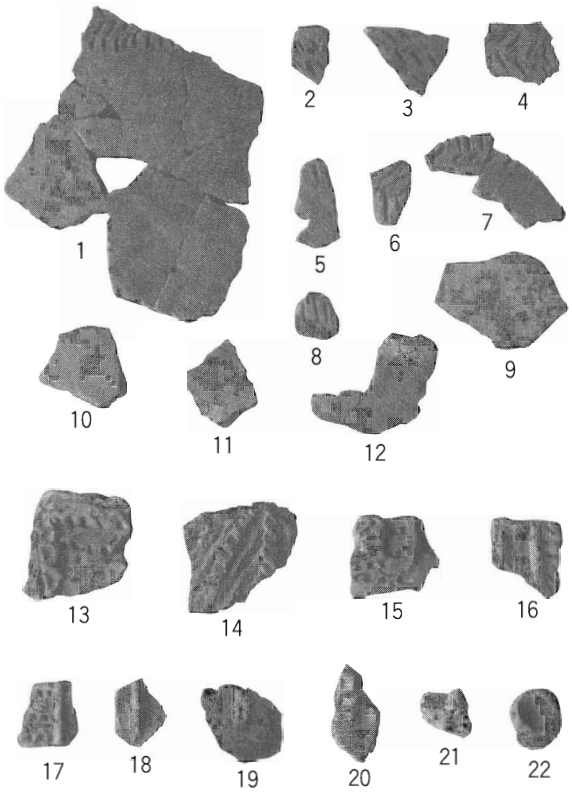
施文方法や器形などの形態から，まず下記のように分類した上で，それに従って以下，詳細にみていくことにしたい。

- Ⅰ　縄文早期末 前期初頭
  - ⅠＡ類 刺突文系
    - ⅠＡ１群 ノ字状のもの
    - ⅠＡ２群 羽状のもの
- Ⅱ　縄文前期
  - ⅡＡ類 押引・刺突文系
    - ⅡＡ１群 隆帯を伴うもの
      - ⅡA1a縦･横のもの
      - ⅡA1b縦のもの
      - ⅡA1c横のもの
    - ⅡＡ２群 段・稜を有するもの
      - ⅡA2a帯状の段
      - ⅡA2b段ふうの稜
    - ⅡＡ３群 押引文を中心とするもの
      - ⅡA3a横走のもの
      - ⅡA3b縦方向のもの
      - ⅡA3c弧状のもの
      - ⅡA3d隆帯を伴うもの
      - ⅡA3e刺突併用のもの
    - ⅡＡ４群 その他の沈線文を有するもの
  - ⅡＢ類 轟・曽畑式系
    - ⅡＢ１群 隆帯を伴うもの
      - ⅡB1a水平で鋭角的なもの
      - ⅡB1b水平で丸みを帯びたもの
      - ⅡB1c波状のもの
    - ⅡＢ２群 沈線文を有するもの
      - ⅡB2a対向連弧文で描くもの
      - ⅡB2b口縁部を短線で飾るもの
      - ⅡB2c粗雑な太描きで飾るもの
  - ⅡＣ類 里木１式系
- Ⅲ　縄文前期末 中期初頭
  - ⅢＡ類 大歳山系
  - ⅢＢ類 船元系

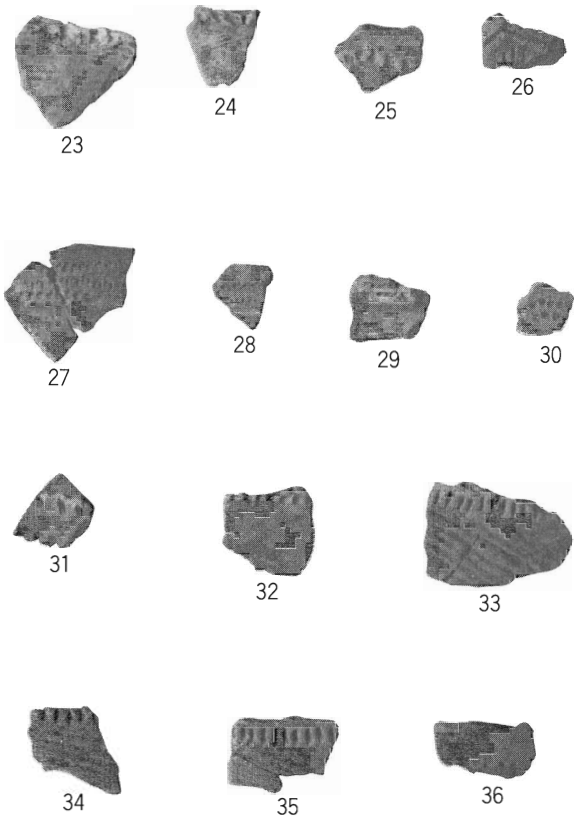
2．実測土器

ⅠＡ　１～12はⅠＡ類としたもので，内外面に条痕文が施された口縁および頸部片。頸部は緩やかで，口縁端部の外面側に稜をもち（２），その下方に羽状（１・４・６・７）およびノ字状（２・３）の刺突文が付けられたもの。器肉は５～７㎜を測ってやや厚手。胎土は軟質的であるが，比較的緻密で，その色調は褐色から暗褐色おびる。いずれも類似した条痕調整のものであるが，施文の違いから１固体のものではないと考えられる。これらは広義にいう羽島下層Ⅱ式に比定できるものであろうが，施文形態などからみて，その以前の可能性ものこしている。

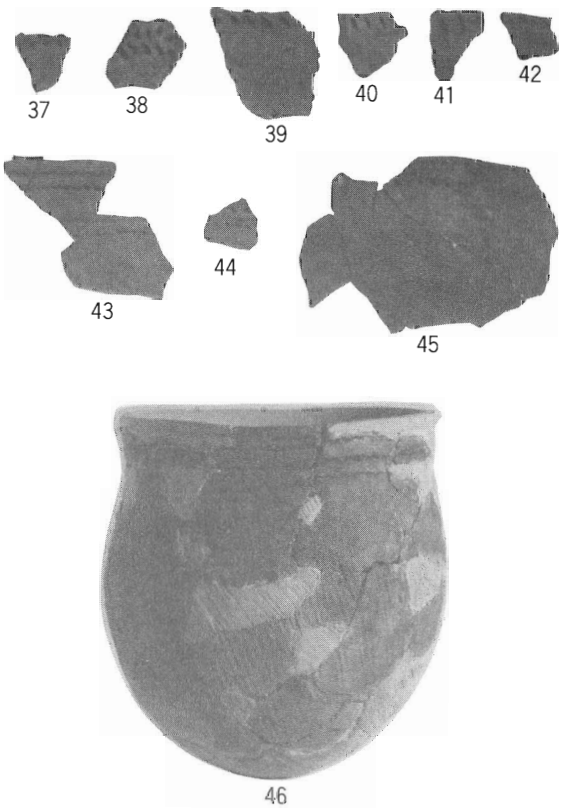
ⅡＡ　13は，内外面を板状や貝殻の施文具で条痕を地文としたもので，口唇を欠く口縁部である。外面には刺突が付けられ，そして縦，横方向の三角形状の隆帯が貼付けられているもの。さらに三角形状の横方向の隆帯下方には半截竹管文，そして縦方向の隆帯の頂部には指頭の押圧を施している。胎土には石粒を含み，その色調は灰～褐色おび，焼成は堅緻である。なお本片は，後述する14と同形態のもので，縄文前期末の九州系の可能性ものこす。



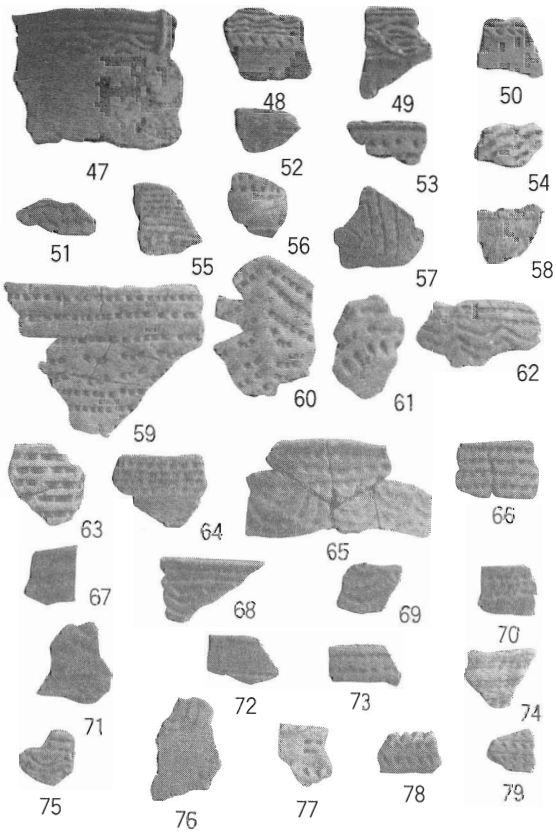
1．ⅠA1・ⅠA2・ⅡA1群～



2．～ⅡA1・ⅡA2群～



3．～ⅡA2・ⅡA3群～



4．～ⅡA3群（～図14へ）

図10　出土土器類1

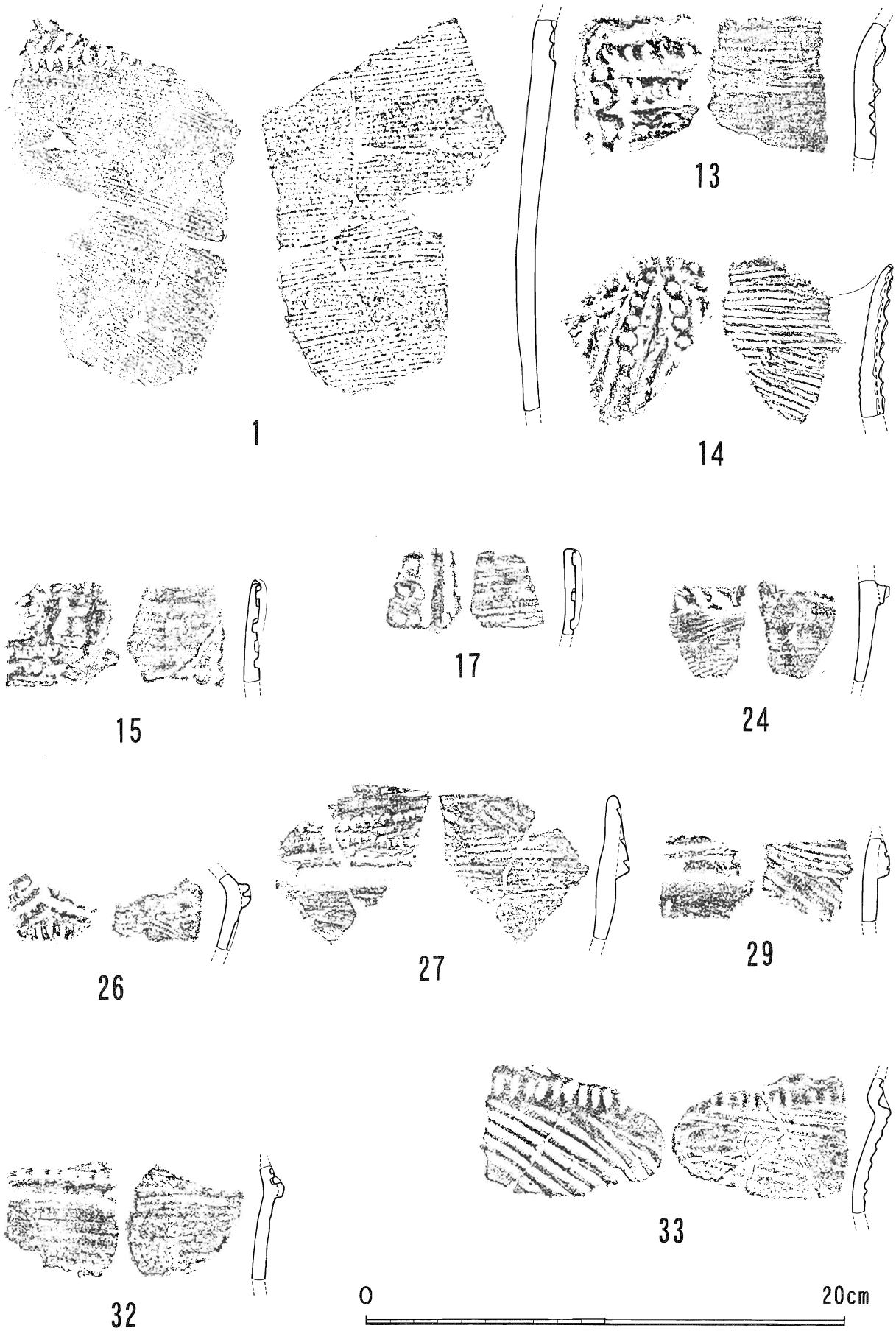


図11　実測土器（1）

14～22は主に縦方向に隆帯，あるいは浮文形のものが貼付けられたグループで，ⅡＡ１ｂとしたもの。このうち14は，厚手の波状口縁部である。内面には顕著な条痕が施され，また外面生地には波頭部から八の字状に押引文が付けられる。そして生地面の上部にはさらに波頭部からの３本の隆帯が付けられ，その頂部に刻みを施文しているもの。なお口端部にも刻みもみられ，口端部外面には押引文が縁周するように付けられている。胎土，焼成とも精緻である。15は，外面側に２つの浮文状のものが貼付けられているもので，条痕地に横走の押引きが施文されている。また口縁端部には貝の腹縁部による刻みがみられ，内面はナデ。16～19は，１・２条の筋状の浮文が貼付けられたもので，いずれも条痕地に刺突が付けられ，16・17は４㎜程度と薄い器肉である。20は隆帯に深い刻みが付けられ，21は突起をなし，口端部と外面側に刺突が付けられたもの。22は，口端部外面側に貼付けられた円形浮文で，その貼付け部の外面周縁に刺突が施されたもの。

23～26は，分類でいうⅡＡ１ｃとしたグループで，凡そ隆帯が横走するものである。このうち23～25は，内外面とも条痕調整で，黄褐色を呈し，いずれの隆帯に施された刻みは深い。26は，口端を欠く波状の口縁部と思われるもの。断面はくの字状を呈し，外面側に隆帯を貼付けて肥厚させている。そしてその隆帯の頂部に沿い沈線が施され，また隆帯の下方の条痕地には縦方向の数条の沈線が施文されている。内面はナデで，胎土の色調は暗褐色。

27～45は，ⅡＡ２とした段・稜を有する刺突文系のもので，そのうち27～32はａとする帯状の段が顕著なもの。またｂは，33～36までの口縁・頸部に段ふうの稜をもつもの，そして37～45は稜をもったものである。

このうち27は，口縁部外面に貼付け帯がされ，段が明瞭なもの。内外面とも条痕調整で，外面の肥厚させた貼付け帯には，列点状の刺突文を３列横走させている。しかしその列点刺突文には，縦・横方向，羽状ふうなどの３様があって異なる。胎土の色調は灰褐色で，焼成は堅緻である。28は，27と同形態のものであるが，肥厚帯は狭く，列点文は２列である。29は，押引文で条痕調整，また30は竹管の施文のものである。そして31・32は，前述のものよりは段は弱く，前者は刺突，後者は押引きで，調整はいずれも条痕のもの。

33～36は，頸部に段ふうの稜をもつもので，このうち33・34・35は，２枚貝による凹線の条痕文のものである。両者とも外面側の稜の上方に，縦方向の刺突，そして押引文を併用しているが，押引き施文部分で損欠している。これらはその施文法などからみて，おそらく前期初頭もしくは早期末に位置付けられるものではないかと想定している。36～42は凹線状の条痕のものではない。38は羽状，そして41の斜め刺突状の押引きはやや長めである。43～45は稜を有するものであるが，その刺突文は押引き風ではなく，列点状に施文するもの。このうち43は内面側に横方向，外面は縦方向の条痕地文とし，その外面口縁部は横ナデで調整する。また外面側に施文する列点状の刺突は，上方の２列，下方に２列の計４列を横走させ，やや押引き風に捉えられるもので，また口端部にも刻みを付ける。45は，竪穴住居址（ＳＩ）に出土した内外面とも条痕調整の口頸部である。頸部から外反し，口縁部に至って稜をつくり，ややその姿勢を正して立ち上がる器形のもの。口縁部の器肉はやや厚みおびるものの，他は３～４㎜を測って全体に薄く，精緻な焼成である。やや内反おびる口縁の外面には２列に横走する刺突文を配し，その口縁部には下垂する浮文状があったことが，欠

損するものの看取できる。

これらの段・稜を有する前述のものは，凡そ縄文前期前葉に位置付けられるものであると捉えられる。とくに段を有するものは古いタイプの形態のものと思われ，早期末まで溯られるものと想定できるもので，量的にも比較的出土しているのである。また45の器形的形態にみられるように，これらは本遺跡を特徴付ける土器ということもできよう。いずれにしても，器形的形態なども含め，今後は押引文系あるいは刺突文系，また押引・刺突併用文系などとの相互関係も捉えていく必要が出てきたのではないかともいえ，注意すべき土器群であることには間違いないと考える。

46～84は，ⅢＡ３とする押引文系（一部，刺突文も含む）の１群である。そのうち46～74は，凡そ横方向に押引くもの，75・76は弧状をなすもの，そして77～84は縦方向に押引いたものを横走させたものなどである。また，この中には49のように隆帯が伴うもの，そのほか刺突文などを併用するものなどの，以上５つに細分できるものと思われる。しかし，これ以外にも複雑にからみあって構成しているものもあることは事実である。

このうち復元された46は，配石を伴わないＳＫ25から出土したもので，口径は約17cm，器高21.5cmを測るもの。平口縁で，底部は丸底であったと想定される。そして頸部は短く，緩やかに外反し，胴部は丸みをもって張り出すといった器形である。また文様などの施文は，口頸部辺に３，または４本の横方向の押引きを施しているが，幅が狭いため沈線的にみえる。全体の器面には，斜めのハイガイによる条痕地としているが，内面および口頸部辺はナデ消す。こうした条痕地に押引くものは，月崎下層２式の手法ではあるが，器形においては曽畑２式に近似する。

47も，基本的には前者の46と同形態のもの，口縁部外面には２本の横方向のもの，その下部には横走の弧状短線を上下に配し，そしてその間を縫うように，曲線状の押引きを施文したものである。器面は条痕地のものであるが，内面と外面口縁部はナデで調整し，46と同様に器肉は薄手である。一方，その文様帯には２条あったと想定されるが，垂下する貼付けの浮文を配している。なお胎土の色調は褐色，焼成は堅緻。

48は稜をもった口縁部で，外面には横方向の直線状，また波状的曲線，斜め方向の刺突状の押引文を配したもの。49も，稜をもった口縁部で，押引文には直線状のものと，短弧状，そして下方に斜め方向の刺突状の組み合せたものである。また口端部に刺突，そしてその条痕地には弧状の隆帯が付けられ，その頂部にも押引きがみられる。胎土の色調は明橙色を呈しており，搬入品かも知れない。50・51も段ふうの稜をもった口縁部片。両者とも細い横方向の押引きと，斜め方向の刺突状の押引きが施文されたもので，うち前者は両面側に条痕をのこしているが，後者はナデ消しである。52は，条痕が内外面とも顕著なもの。53は，口端部に刻みを施し，そして横方向に施文した２本の押引きの間に刺突を横位に配したものである。54は，弧状を呈したものであるが，その押引きの強弱差が少なく，沈線状にみえる。

55は，細めの８段からなる横方向の押引文で，その下端部には損剥する隆帯痕がみられるもの。また文様帯と隆帯の間には粘土接合部が看取できる。内面は条痕，胎土には砂粒を含み，その色調は黄褐色を呈している。56は，頸部はよく窄まり，口縁部に向かって内反する口頸部。内外面とも条痕調整で，口縁端辺の外面には２列の刺突文を横並させているもの。57は，内外面とも顕著な条

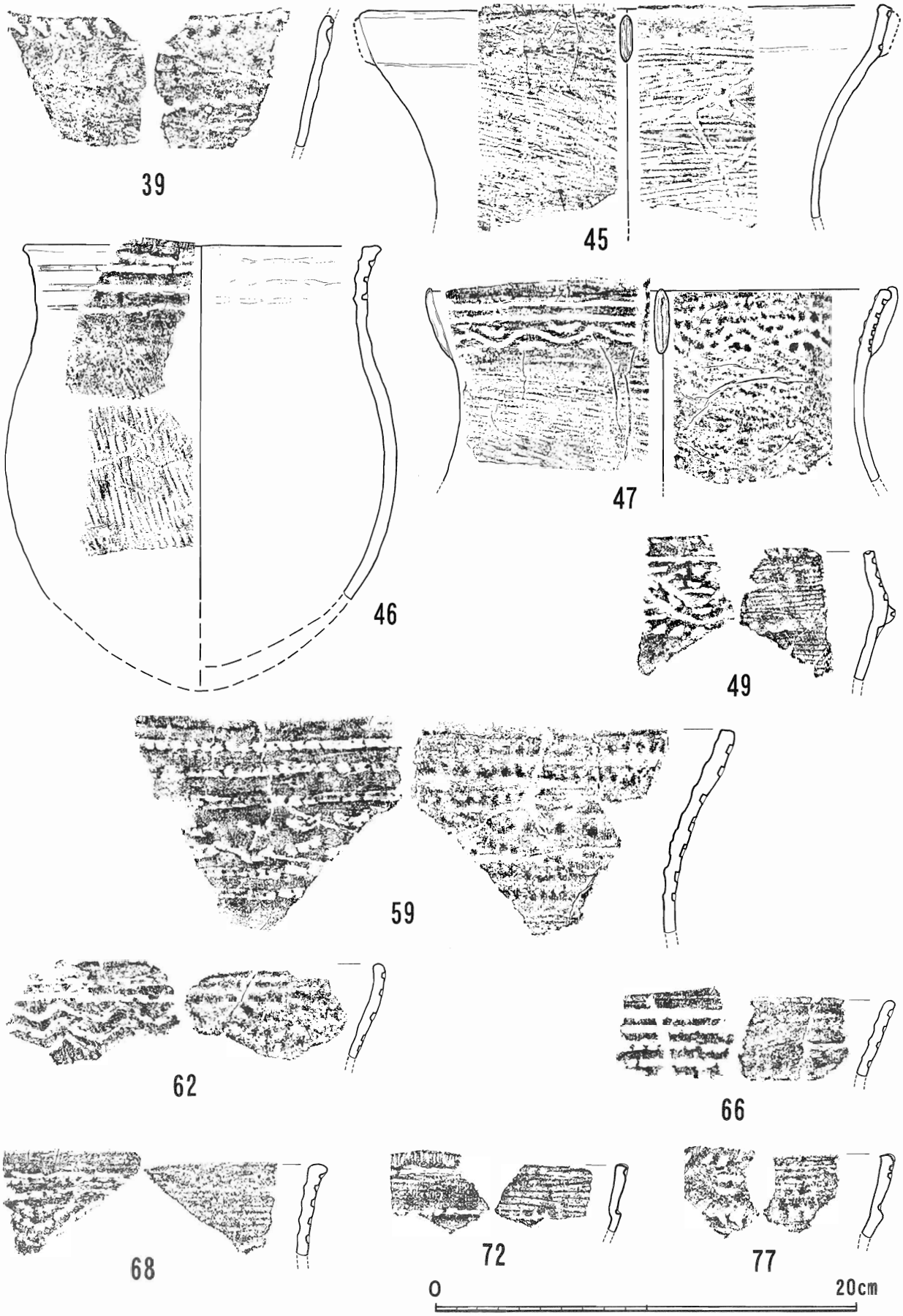


図12　実測土器（2）

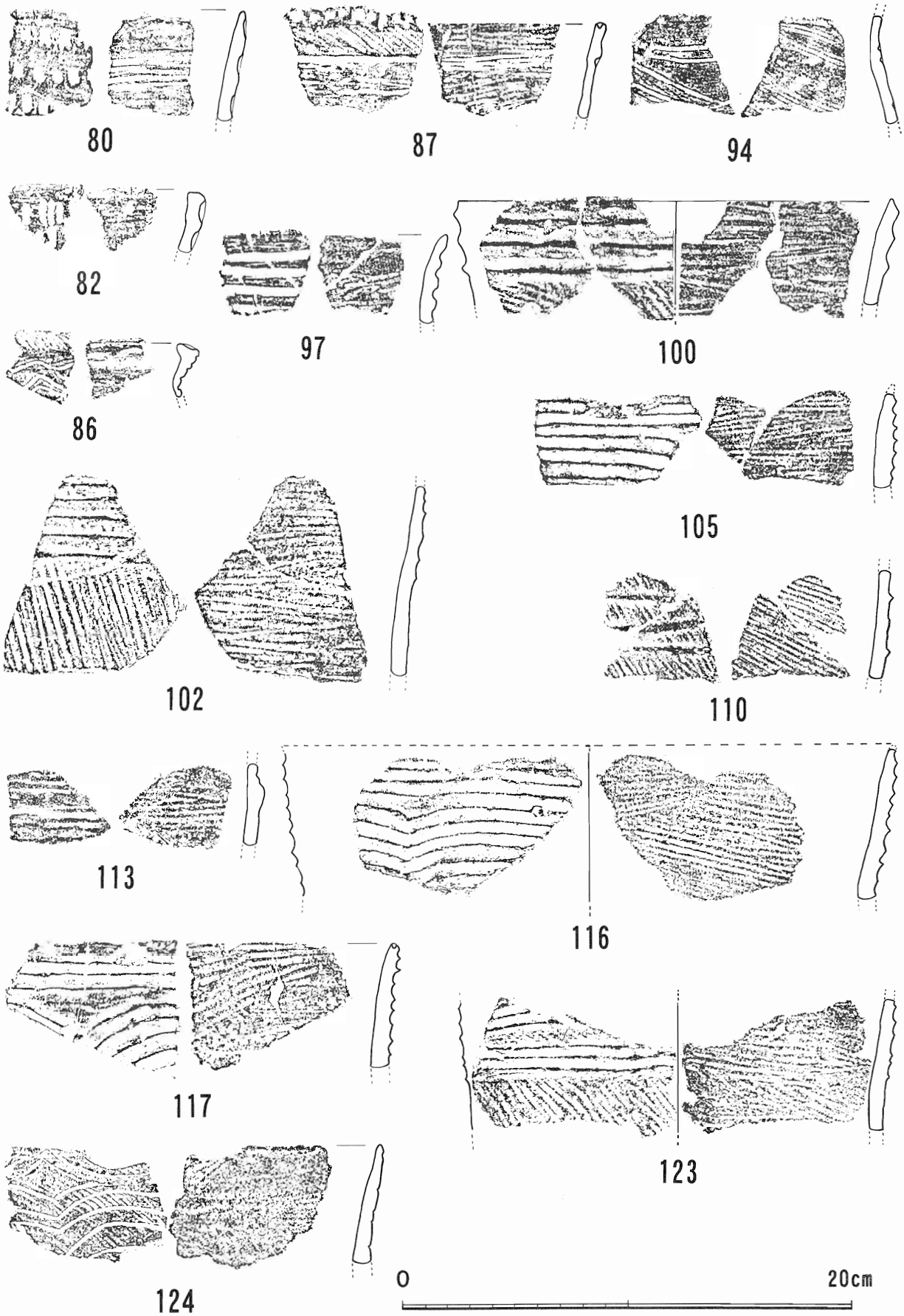


図13　実測土器（3）

痕が施され，外面には列点状の浅い押引きを方角・斜状に施文したもの。胎土の色調は灰褐～暗褐色で，焼成は堅緻である。

59・60は同一個体のもので，緩やかに内反する波状をもった厚手の口縁部である。内外面とも条痕地のものであるが，全体にナデ調整を施して平滑で，他のものと比べて新進さを感じさせるもの。押引きは，上方に３本そして文様帯下方に２本を施文し，その間に間断する短弧文を２段に横走させる。他に比べて施文幅は広く，角度は鋭角，そして押引き押圧間隔は狭い。61は，頸部がくの字状に屈折する浅鉢系の口端を欠く口頸部か。内外面とも条痕で，外面の文様帯はナデ消している。前者と同様の施文方法であるが，ただ下方の文様には，縦方向に刺突状の押引くものが組合い，そしてその下端部には稜をもって屈折する。62も，条痕地に押引きを施文したもので，内面はナデで調整しているが，外面には条痕がのこる。施文は口縁部外面の上方に２本の平行のもの，そしてその下に２本の連続曲文，その下端には短弧文を描く。64は，４本の狭い文様帯と頸部上辺との部位に段ふうの稜がみられるもの。

65は，口縁部が外反するもので，器肉は薄い。内外面とも条痕地で，内面は平滑にナデ消しているものの，外面にはその生地がのこる。施文の押引きは浅く，上方に３本のもの，その下方には半円形の曲状文を３重に施文する。また，その下端部は明確ではないが，損欠状況からみて平行文があったものと想定できる。胎土の色調は橙褐色を呈していて，前述した60以下は全て同色調のものである。67は，搬入品であろうか，３本の凹状に調整した凹部の凹みに，半截竹管文で押引いたもの。器肉は薄く，胎土の色調は黒褐色で，焼成は極めて堅緻である。68は，前述の67とは同一固体のものではないが，同形態のものである。70は，３条の横方向の狭い文様帯のものであるが，その押引きは結連しない。その下端部に段ふうの稜をもち，内外面ともナデ消しされているもの。

72は，口縁の上・下端部に１条ずつの細かい刺突状の押引文を施文し，下端部下には屈折して段を形成している。また口端部には貝の腹縁による刻みが付けられている。地文は条痕で，とくに外面は精緻にナデ消されているが，内面にはのこっている。薄手で，色調は暗褐色。74は67と同様，浅い凹状を施し，その凹み部分に半截の竹管で押引いている。内外面とも条痕地であるが，後に軽くナデ消している。76は，口端を損欠する口頸部で，頸部辺に横方向の意図的と思われる４本の細い沈線状のものが施文されている。外面には条痕をのこすが，内面は平滑にする。77は刺突状に単発的に，横あるいは縦方向にと，疎間に押引文を施文するが，文様帯下端部で段ふうの稜をもって屈折するもの。

77～84は，凡そ縦方向に押引くグループである。そのうち78は，口端部に深い刻みが付けられ，内外面は条痕地のもの。外面はナデ消しされ，そこの口端部辺に刺突を横走させ，その下辺には縦方向の刺突状の押引きを施文したもの。口端部を深く刻む手法からみると，彦崎Ｚ１ともいえそうであるが，条痕地であること，あるいは刺突などの施文から捉えると，月崎下層併行期のものであろうと考える。79は，沈線状の押引きを平行間隔に施文し，その区画に刺突状の縦方向の押引文を２列に横走したもの。内面には条痕がのこり，器壁はくの字状に屈折する。80は，緩やかに内反した口縁部で，内外面とも条痕調整。外面には縦方向の刺突状の押引きを３列に横走させているもの。83は細めの刺突に近い手法，また84は沈線の中に施文するといったもので，この両者は大歳山系と

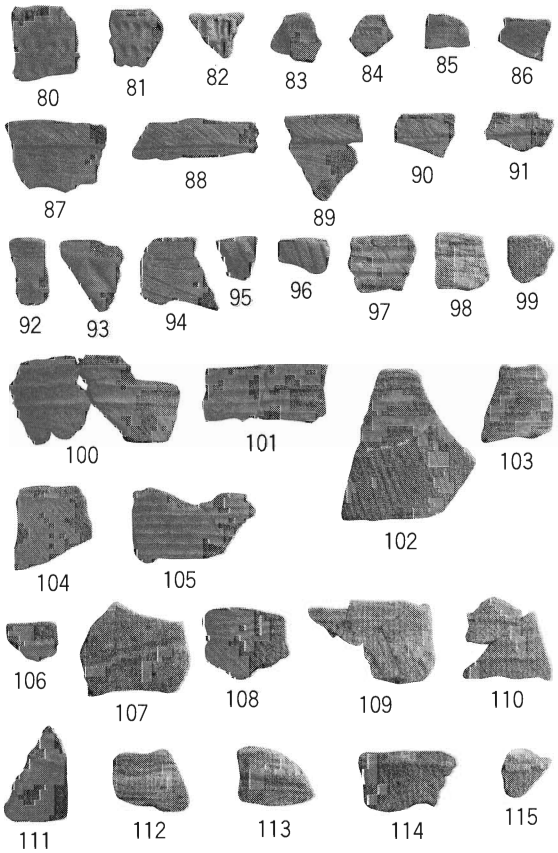
も考えられる。以上，これらの縦方向に施文するものは，同じ縦でも段・稜を有するものとは（ⅡＡ２とする27～42など）施文上からも明らかに違いがみられ，そこには時間的差があることは確かであろう。

85～99は，その他の不明なものであるが，凡そⅡＡに包括できる沈線文系として捉えられるグループである。このうち85・86は，口端部を肥厚させ，その口唇部は内傾するもの。端部には刻みを付け，外面は条痕地として，前者は横方向，後者は波状の曲線状の沈線を施文する。87～90は，１個体のものと思われるもので，外傾する口縁部である。内外面とも条痕が顕著で，口縁部外面に帯状の貼付けがされ，その下界部には１本の横方向の沈線で区切るように施文する。また口端部には刺突状の押引きを列点する。91も，前者のものと同形態のものであるが，貼付け帯が狭く，波状口縁の可能性ものこしており，はっきりとしない。92は，後出の94と同一個体のもの。内外面は条痕地で，薄手。外面には，２本を単一とする曲線沈線を施文し，その区画内に条痕をのこすもの。95・96は，口端を肥厚させ短く内反するもので，沈線を口端から斜向に横並して施文したもの。98は，内外面とも顕著な条痕を地文とし，２本の平行沈線を施す。胎土の色調は明橙色で，薄手。

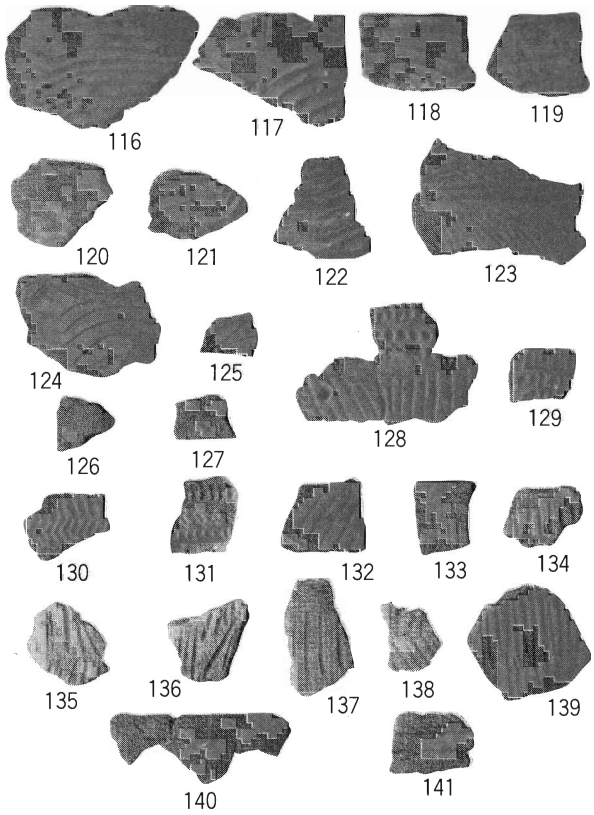
ⅡＢ　本項はⅡＢとする轟・曽畑式系のグループのものである。そしてこれらを隆帯（轟式系）を伴うものと，沈線（曽畑系）を中心とするものとに大枠で分類した。以下，轟式系のものから順次にみていくことにする。

100～105は，ミミズばれの隆帯が水平で，その先端の頂部が鋭角的なもの。そのうち100は，口径約20cmを測る小振りの口縁部。内外面に顕著な条痕を施し，外面には３条の隆帯を貼付け，その口縁部外面をナデで仕上げる。器肉は９mmを測って厚手。胎土の色調は黒褐色。102は，頂部が鋭角であるものの隆起がなく，１mm程度。胎土の色調は，赤焼けし明橙色。105は，隆帯間が狭く，口縁下半部を損欠しているものの，７本を数えて多条といえるもの。105は，内外面は条痕で，極めて薄手。貼付けられた隆帯は，器肉に比べて隆起し，鋭角的。107は，隆起は弱いものの鋭角的で，隆帯は２本。色調は，赤焼けし明橙色。108は，隆帯間は狭く，その頂部はやや丸みおび低く，胎土の色調は暗褐色。109・110は，内外面の条痕が顕著で，前者の文様帯部はナデ調整し，いずれも明橙色。

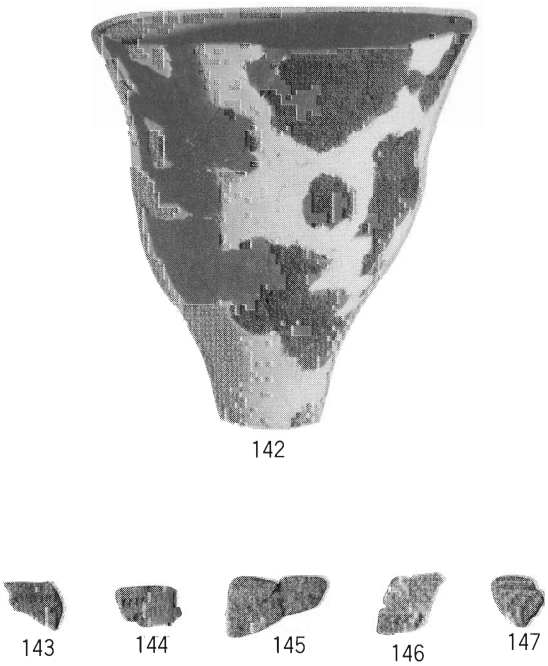
112～115は，ⅡＢ１ｂとした隆帯が水平であるものの，その頂部が丸みおびたものである。とくに112・113は，ナデが顕著で頂部は潰れ，地文の条痕にもその影響を及ぼす。いずれも赤焼けして明橙色を呈しており，搬入されたものであろうか。116～123は，土器形式でいう轟ｂ式の２・３類として位置付けられているグループである。このうち116は，口縁下部を損欠するものの，隆帯は９本を数えて多条である。そしてその隆帯は波状に貼付けられ，外面の文様帯には地文の条痕はみられない。内面は条痕調整で，胎土の色調は橙～褐色。117は，焼成が極めて堅緻な口縁部で，外面の口端辺に３本の平行隆帯，下部には５本からなる半円状の隆帯が貼付けられたもの。内面は条痕調整，外面はナデ調整とするが，隆帯は鋭角である。また口端部には貝の腹縁部による刻みが刺突されている。118は，口端辺に２本の平行隆帯，下部には３本からなる連続弧文を配したもの。119は，内外面の条痕は粗く，隆帯も段凹気みで拙稚なつくりで，口端部には沈線が施文される。123は，口径凡そ20cmを測って，口端部を損欠するもの。外面は条痕が顕著であるが，内面はナデ



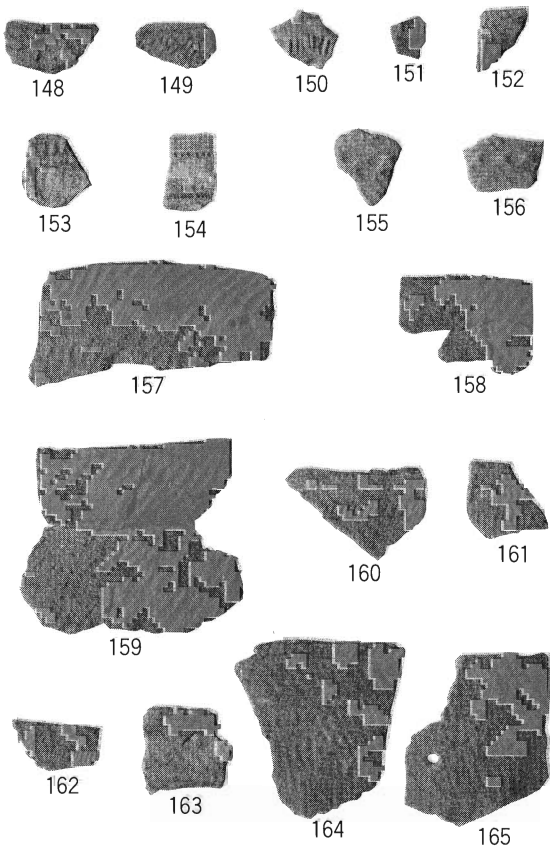
1．（図10-4～から）ⅡA3・ⅡA4・ⅡB1群～



2．～ⅡB1・ⅡB2群・ⅡC類～



3．～ⅡC・ⅢA類～



4．～ⅢA・ⅢB類

図14　出土土器類２

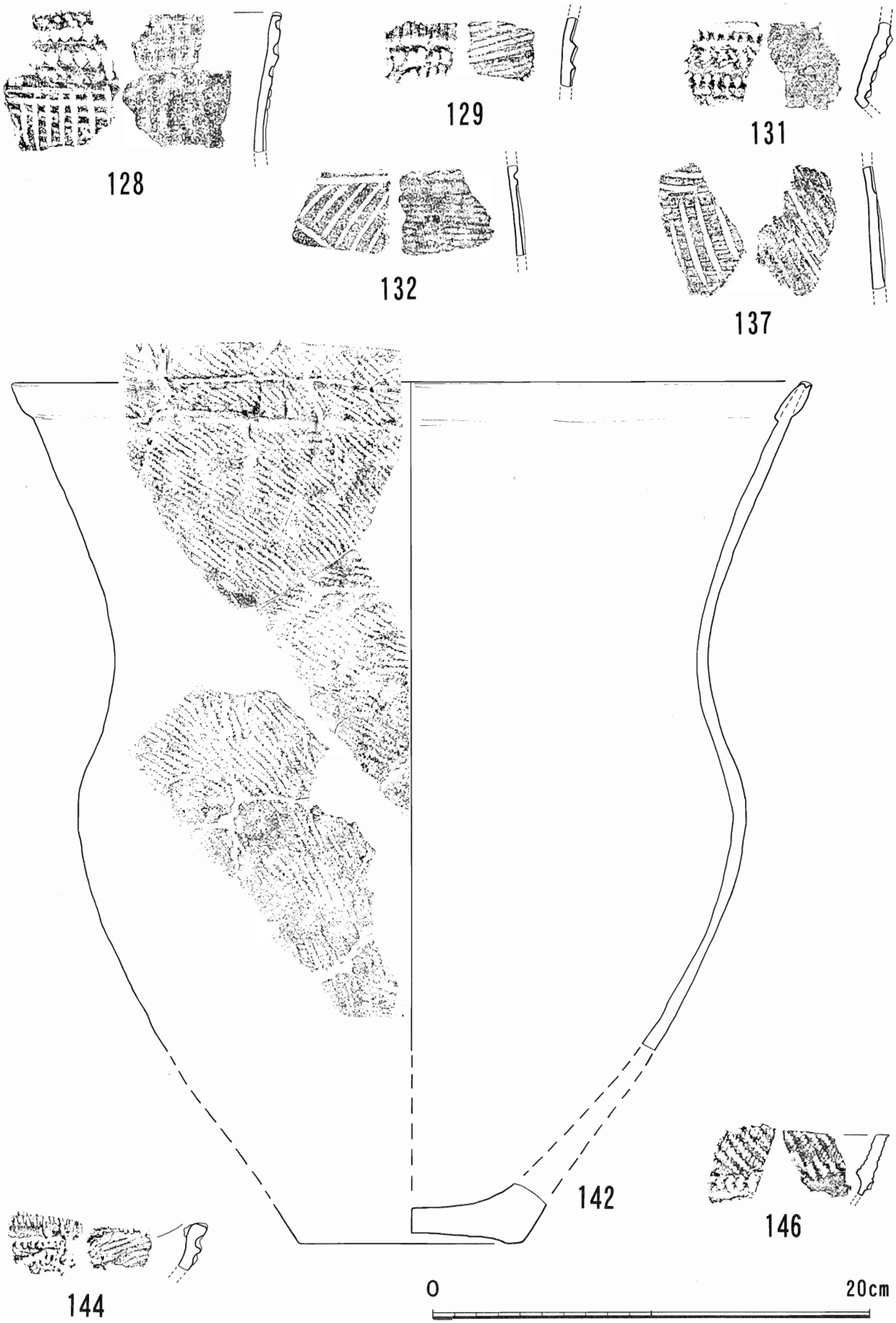


図15　実測土器（4）

調整を施す。　124～139は，ⅡＢ２とした沈線文を中心としたものである。このうち124～127は，プロト曽畑系の対向連弧文を施文したもの。128～131は，曽畑系の古い段階のもので，口縁を中心にして短沈線で飾るもの。そして132～139は，その新段階のもので，ⅡＢ２ｃとした粗雑な太描きのグループ。

うち124・125は，外面は条痕，内面はナデ消し。そして外面には３本の対向の連弧文を描き，曽畑Ⅱ式といわれるもの。胎土の色調は橙褐～暗褐色を呈し，焼成は良好。126・127は，同一個体と思われるもので，両者とも条痕調整の後ナデ消すが，前者の内面には条痕がのこる。また外面には，極めて細く浅い筋状の沈線で施文するもの。

128はⅡＢ２ｂとしたもので，薄手の口縁部。内外面とも条痕地で，後にナデ消す。口縁外面には３列の刺突文を横方向に，その下方に横あるいは縦方向に沈線を施文したもの。130は，斜め方向の短沈線を横列にし，下方に向かっては逆斜め方向に横列させるといった，つまり，くの字状に繰返して施文したもの。また口端部には刻み，そして内面側に１列に短沈線を施文している。131は，口縁部は外反し，頸部はくの字状に屈折するもの。内面はナデ，外面には数条の横方向の凸状の隆帯をつくり，その隆帯の頂部を刺突状に羽状または斜め方向に押引いたもの。つぎの太描きを中心としたグループの132は，内外面とも条痕地に後にナデ調整としたもの。薄手で，極めて焼成は堅緻。133は，内外面に条痕をのこし，薄手の堅緻な口縁部である。134～138は，胎土の色調が黄褐色を呈しており，いずれも条痕地で，内外面をナデで調整しているが，条痕がのこる。139は胴部片で、内外面とも条痕，そして内面は軽いナデ調整。胎土の色調は，茶褐色，外面には煤が付着。

ⅡＣ　140～142は，里木Ⅰ式に併行するもの。薄手で，口縁端部に折返し，または貼付け突帯をつくり，器面を単節の縄文で施文したものである。このうち141は，口縁部が内反した薄手のもので，端部に刻みが付けられている。また外面端部は縄文，その下部には横方向に２本の沈線状の押引きが施文され，その部分はナデ消しである。142は，口径約37cm，底径約10cm，推定器高約45cmを測る深鉢の復元土器。外面は単節の斜行縄文ＲＬで飾り，口端部の外面には折返し，また内面には貼付け帯を縁にまわして肥厚させ，そこに縄文を施文する。内面は精緻にナデ調整とし，底部外面は逆く凹みの僅かな揚げ底を呈したもの。器肉は４～７㎜と薄手で，胎土の色調は橙褐～暗褐色で，焼成は良好。

ⅢＡ　143～147は，里木Ⅰ式と船元Ⅰ式との過渡的なものと位置付けたもの。このうち143・144のように，口縁端部を内外面から刻み（船元Ⅰ式Ｂ類），また外面施文においては横方向の押引きの中に，縦方向の刺突を点列するなど前期的な手法もみられる。146・147は，船元Ⅰ式Ｃ類の口縁器形に近似するものの，縄文は３本撚りのもので，そこには里木・大歳山系のバリエーションとも捉えられるものを含む。148～156は，凡そ粗い縄文を特徴としたもので，それは広義にいう船元式の古段階のものと一致する。しかし148のように，口端部を内外面から刻むものもあり，また153にみられる下垂する隆帯の施文手法には，一方で大歳山系のバリエーションを思わせるものも含んでいるのである。なお前後するが，山形口縁の150・151は，隆帯に爪形文をもち，また150は粗い縄文で，船元系の特徴を示すもの。155・156は，内面はナデ，外面には縄文地として横走の突帯を付

け，その頂部に貝殻の殻表部をもって押圧したもの。胎土は軟質的で，淡橙色を呈する。

157～165は，粗い縄文地の厚手のものと，粗い縄文地に隆帯を施文されたグループで，船元２式に共通するもの。このうち157は，キャリパー形の口縁器形で，外面には粗い縄文を施文し，口縁端部に爪形ふうの刻み，そしてその内面側を肥厚させ，逆方向の縄文を施文したもの。158・159は同一個体のもので，手法は前者と同じ。ただし，後者は口縁部が短く屈曲し，口端部内面の縄文・ナデ調整とが鋭角的に部界しているもの。これらはいずれも厚手で，色調は茶褐～暗褐色で，焼成は堅緻である。160は波状口縁部で，端部には粘土紐を貼付けて幅広し，そこに縄文を押圧する。また外面には２単位の隆帯を横走させ、その上面を半截竹管で爪形文を施すもの。161は，前述の157～159の形態に近似する口縁部で，外面には貼付けの隆帯を横走させているものの，160とは異なる。163・164・165は同一個体のもので，いずれも損欠部は屈折部位のものである。その屈折部位には２単位の隆帯が横走されていたことが看取できるものである。これらの３者の隆帯には，いずれも爪形が施文されているが，161のものとは形態・施文手法に差異がある。つまりそれらは粗い縄文地であるものの，薄手の本者は，形態的には大歳山式に類似すると想定する。

３．押引文系の土器について

前項で概述したように，出土土器からみると，縄文前期初頭から縄文中期前葉にわたる複合遺跡であったことが判明した。その中でも多量に出土した轟Ｂ式・月崎下層Ⅱ式などから，その盛行期は縄文前期初頭から中葉にかけ，そして２次の文化期といえるものは，縄文前期後葉から縄文中期前葉にかけてのものだったと想定する。こうした出土した土器の中で，とくに注意されるのが量的は勿論のこと，多様な形態を示す押引き系統の１群である。この１群は多くの課題を含んでおり，今後問題になるであろう，と考える。

例えば，該当期におけるところの他の多くの遺跡では，爪形文土器を含むのが通例であるが，本遺跡では皆無（船元系の１点は除く）なのである。それは地域的な差によるものなのであろうか，それとも時期的な差によって生じたものなのであろうか。おそらく，それは後者と考えられるが，ただ多様な押引き系からはバリエーションだけでは捉えきれない時期幅が看取され，そこには混在期があってもいいのではないかという問題がのこっているのである。よってⅡＡ２群とした段・稜を有する古段階と想定する押引き系は，中でも特に刺突系の顕著なものは，形態的にみて縄文早期末に仮定できるのではないかと考える（礫群などの集石炉や，また早期とも捉えられる石器類などが検出されていることを含めて）。しかし器形において，その系譜の初源的ともいうべきものに絡続させることのできる土器形式はない。ただし，西川津遺跡などでは，段・稜を有する刺突文系の土器が出土しており，その源泉を長山式土器などの山陰側に求めることができるのではないだろうかと考える。また一方で，月崎遺跡・羽田などに深い親縁があることから，九州を含む西部地域の特徴的形態ではなかったかという，つまり轟Ｂ２式の分布域を仮定しておきたいと思う。

そこで問題となるのは，刺突文土器と押引文土器とは，どちらが古いかということになる。本土器群でみる限り，強い段あるいは稜を有する古形式と想定される極めて狭期間におけるものには，刺突文が顕著であるということは確かである。そして弱くなってゆくに連れ，単一型押引き→単列型分断押引き→刺突併用型押引き，という凡その経過が辿られるように捉えられる（図16・17・18）。

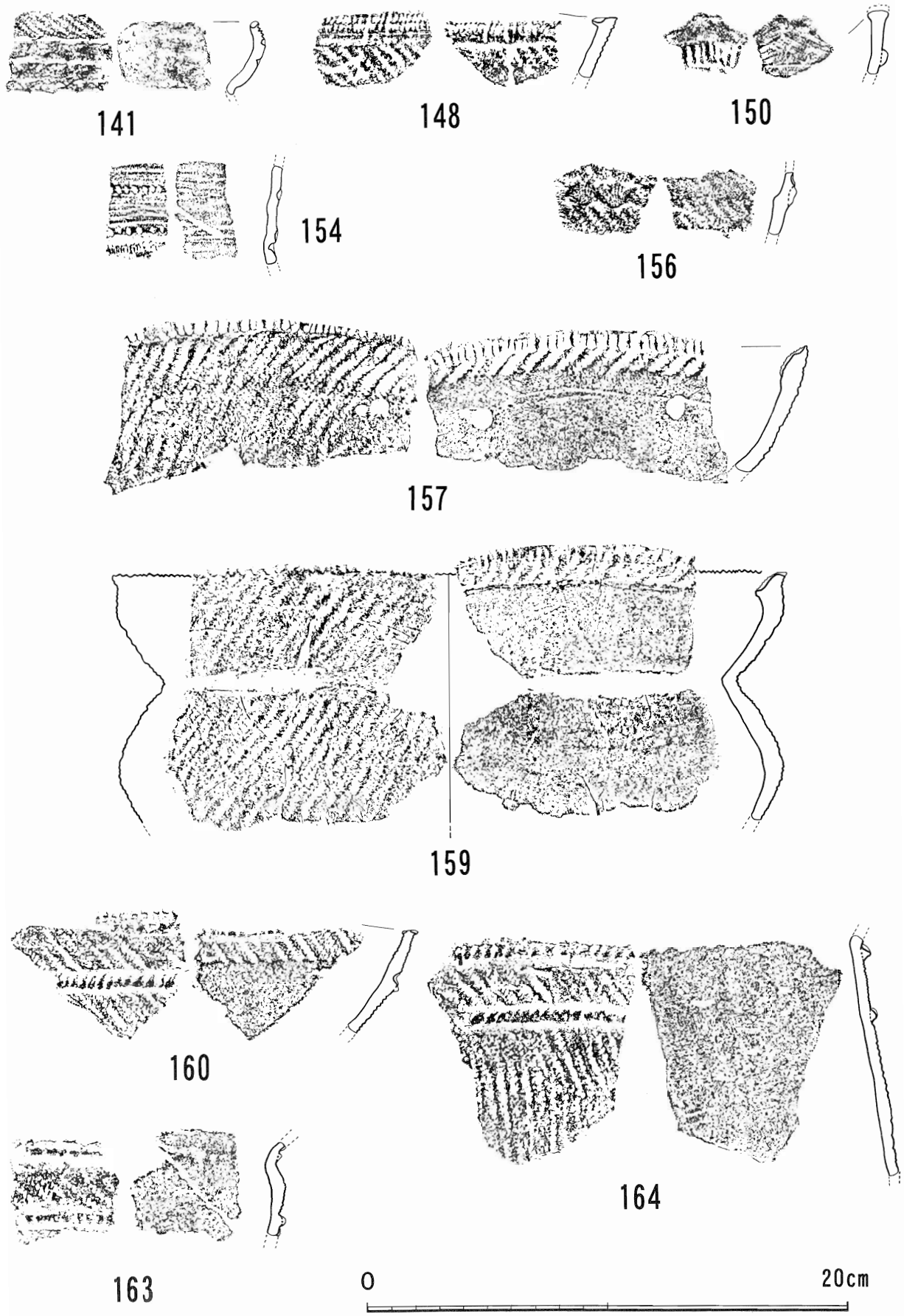


図16　実測土器（5）

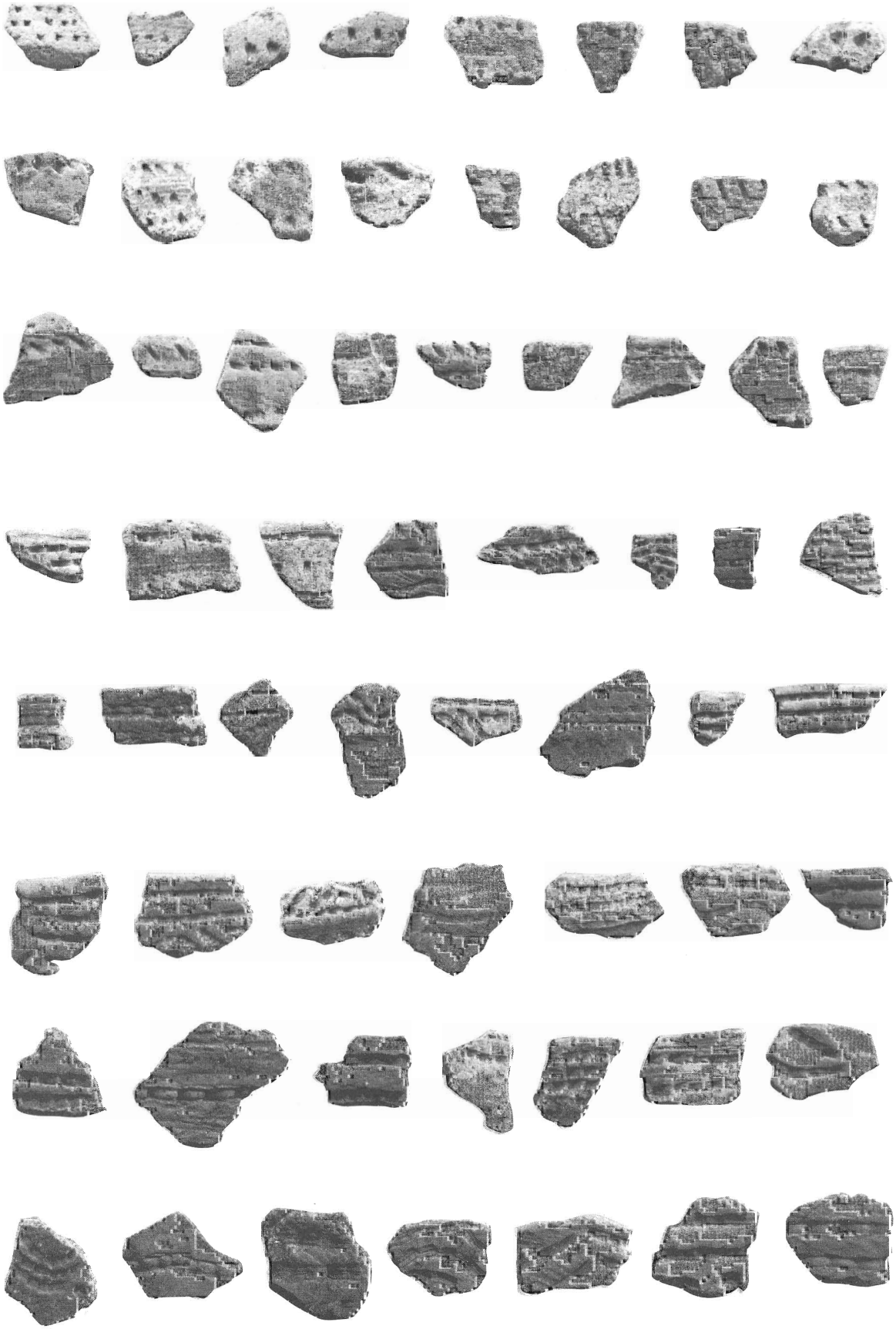


図17　その他の刺突・押引文系土器

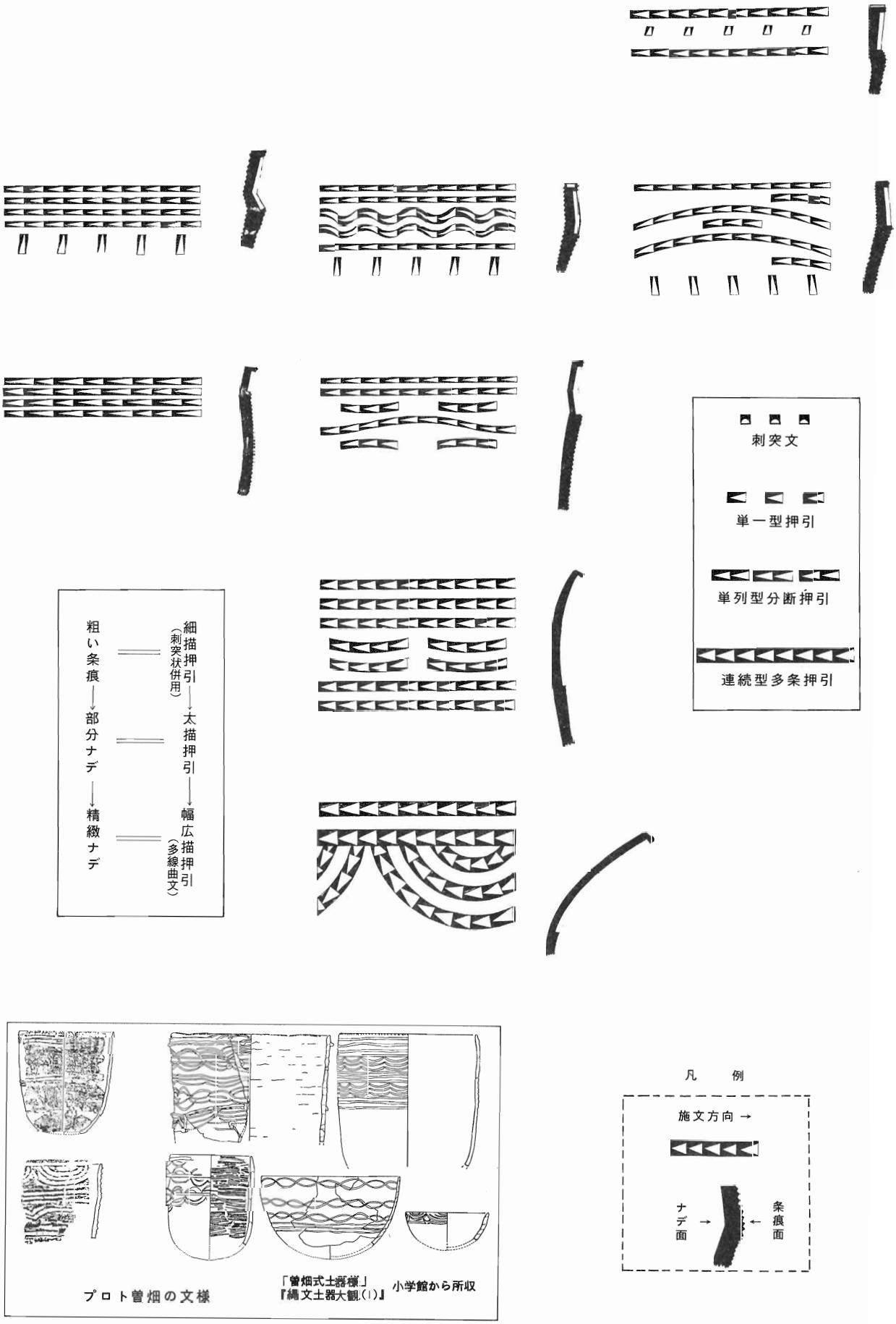
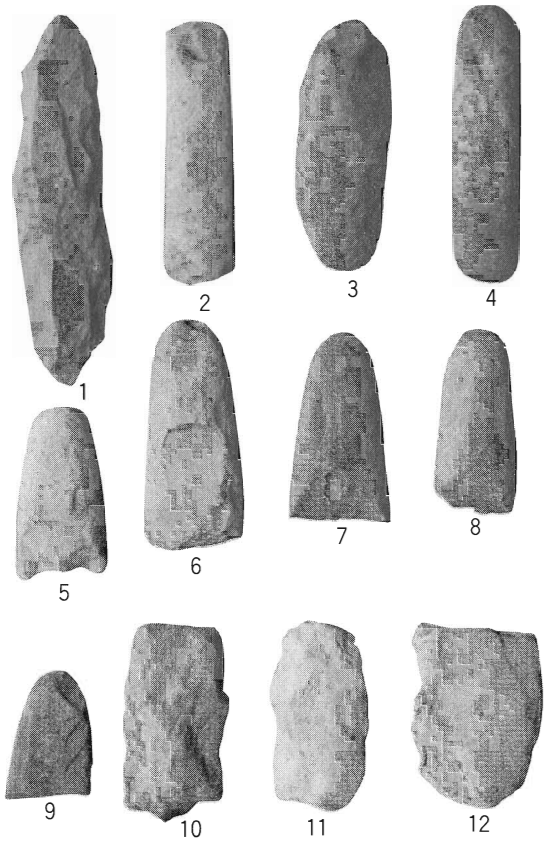
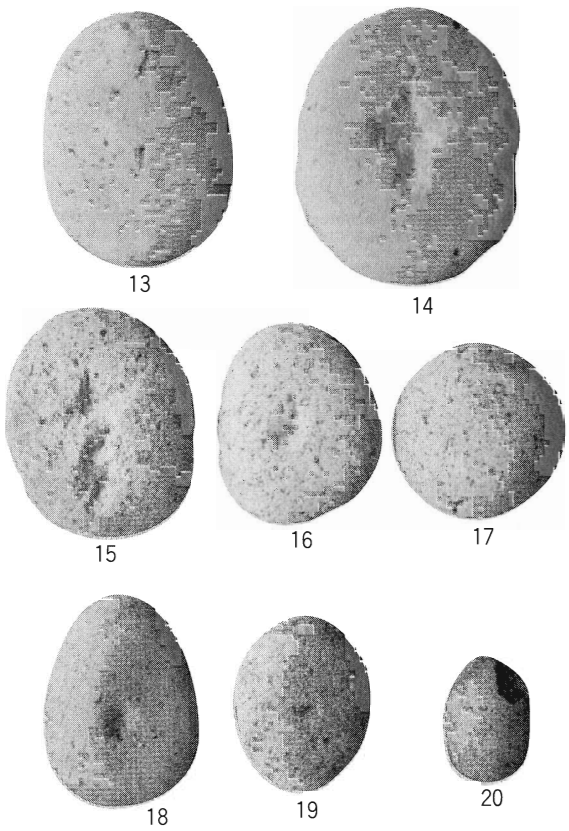


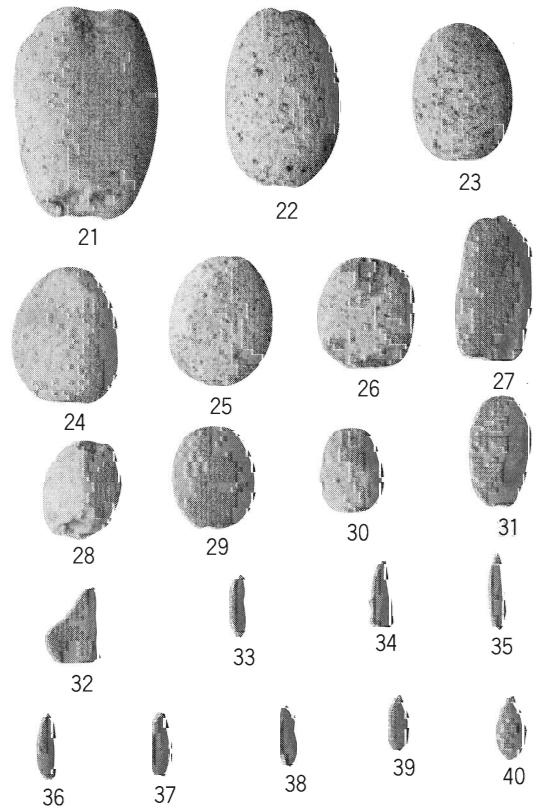
図18　押引文系の口縁部・文様形態パターン図



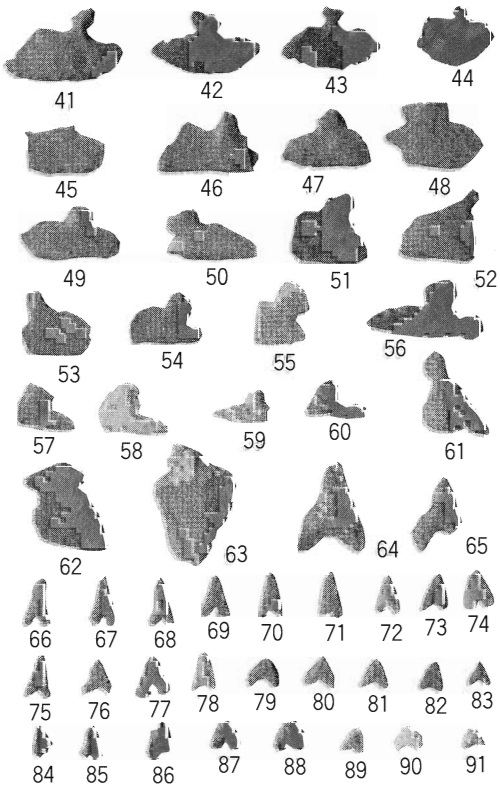
1． 尖頭器・磨製石斧・打製石斧



2． 凹石・磨石・敲石



3． 石錘・石錐・柳葉形石器



4． 石匙・石鏃

図19　出土石器類１

これらは調整上からも，粗い条痕→部分ナデ→ナデというように，窺い知ることができるが，既に郷路橋遺跡では，押引文土器より下層に刺突文土器が出土していることから補強されたともいうことができよう。しかし施文手法あるいは器形的形態などからみて，両者は別系譜から派生した可能性ものこされていると想定している。つまり該地におけるところの刺突文系から押引文系への系譜が辿れるとしても，それは段状あるいは稜を有した刺突文土器系に，別系譜の押引文土器系の文化を取り入れたに過ぎない，とみるのも可能であろうと考えているのである。いずれにしても，今後の資料の蓄積を待ちたいものである。

以上，押引文系土器に限って，空論に過ぎないことを述べてきたが，刺突文系と押引文系とは親縁関係にあるものの，別系譜のものであることは確かであろうと考える。何といっても，今回の意義は，本群に爪形文土器を伴わなかったということにより，両者の間に明確に時代差があることを証明したということであろう。そして，それは押引文系土器の形成期間を限定したともいえるのではないだろうか。いずれにせよ，これらの土器群が問題を提議したことは確かで，今後，西中国山地から周圏のごとく，論議が広がっていくことを期待している。

第3節　出　土　石　器

1．はじめに

石器類は調査区，廃土またはその周辺で採集されたものを含め，約5300点余りのものが出土した（図21）。これらは土器との共伴からみて，縄文前期を中心としたものと想定できる。さらに土器から判断すれば，前期前葉期のものと前期後葉期との２期とに捉えられることから，石器類もその文化期に従随しているものと考えられるが，その包含が３層黒色土という単一層内であったため，層位的に把握することができなかった。また石器の形態や機能上から２期に仕分けすることは困難であるので，以下，代表的な石器類を羅列的に図掲するとともに，若干のコメントの記述のみとしたい。

2．図版掲載石器

尖頭器・石斧　１は、ａｂベルトから出土した尖頭器で，器長約19cm，最大器幅4.8cm，最大厚2.4cmを測り，柳葉状をなす。材質は凝灰岩で，やや風化する。周縁部からやや粗い加撃で成形しているが，比較的均整がとれ，両端の尖りも鋭利である。礫群（集石炉）遺構も検出されていることから，おそらく本点は早期の所産のものであろうと考える。

２～９（３を除く）は明確にはいえないが，磨製石斧と思われるもの，そして３・10～12は打製石斧である。このうち２は，両面側を擦切りで形づくられた石斧で，背面は打裂で形成され丸味おびる。４・６・７も，擦切りによって分割されたもので，本遺跡で比較的登用されていたことがわかる。これらはいずれも凝灰岩質のもので，器面を打裂をもって成形する。３は，器部の断面は楕円形を成し，器形とも均整のとれた打製石斧。土掘具にしては機能的に用を果たせたとは思えず，磨製石斧の未加工のものか，それとも石槍であったものなのであろうか。他は損欠したものばかりで50点余りが出土している。

磨石・凹石・敲石　13は磨石で，器面全体に平滑な擦痕がみられる。14は，背腹面ともに加工痕と思われる凹みの損傷部があり，また背面には多方向からの磨・擦痕が顕著のもの。15も凹石で，両面側とも粗く鋭利的な加工痕がみられる。16は，両面側に加工痕がみられるが，背面には３方向からの段を成して擦痕が顕著である。17は擦痕のみの磨石。20は，両端部からの加撃による打裂痕が顕著な敲石。なお材質は，凹石が砂岩系のものであるが，17の磨石，20の敲石は花崗岩質のもの。

石錘　21～31は石錘である。このうち21は，長さ10.5cm，幅7.5cm，厚さ3.2cmを測る大型のもので，長径側の両面を打ち欠く。22は，長さ8.5cm，幅約9cm，厚さ3.2cmを測るもの。両端は打ち欠くが，うち１端は切目状のつくり。

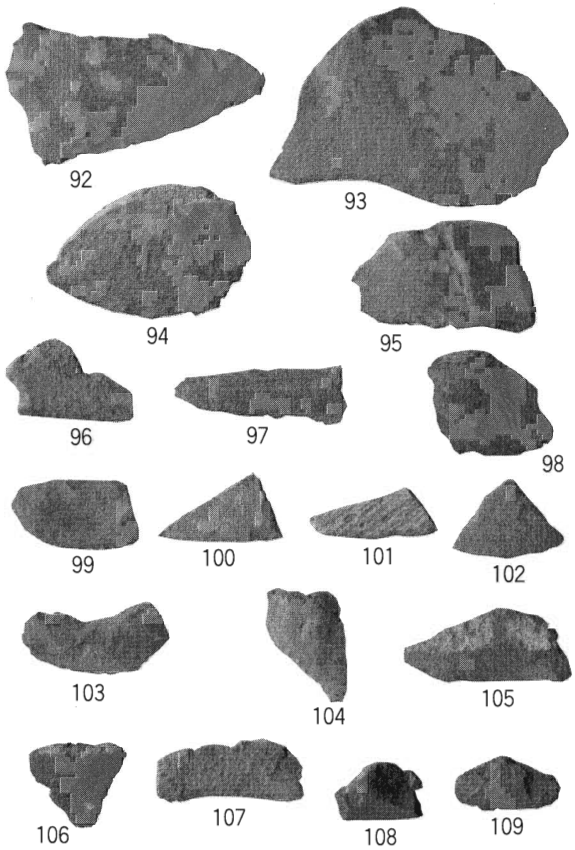
石錐・柳葉状石器　32は，三角錐形をしたもので，錐部の先端は損欠する。おそらく縄文早期などでみられる三角鑽といわれるものであろう。33～40は，柳葉状の石器で，長さ３～４cmを測るもの。このうち33・35・39は，両端部まで丁寧な細部調整を施し尖らせるが，39は半裂状に損欠する。34・37・38・40は，両端部のつくりが異なるもので，うち１方は茎部であった可能性のもので，材質はいずれも安山岩質。

石匙　41～63は石匙で，28点が出土している。ほとんどが横型のものであるが，うち62はその中間型，63は縦型のものである。また刃部は41～44のように，弧状を成すものもみられるが，凡そ直刃形。基部幅においては56～59のように，幅の狭いものもあり，比較的つまみ部は幅広で特徴的である。そして器形は正三角形状のものはなく，つまみの位置とともに片寄り偏形し，42・49・56・62は１cm前後を測ってぶ厚い。材質は玄武岩，凝灰岩・安山岩系のものである。

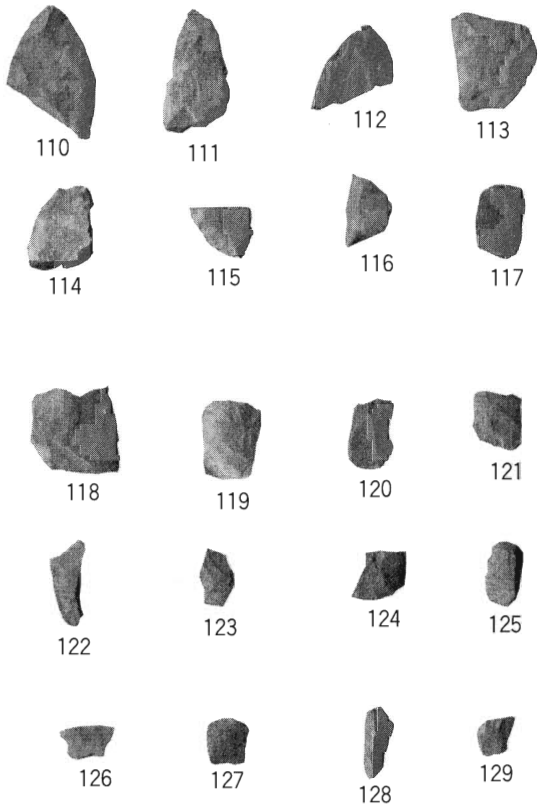
石鏃　64～91は石鏃で，うち66～83が安山岩系，84～88が黒色の黒耀石製のもの，89～91は乳白色の黒耀石製である。このうち64は，器長5.5cm，強い抉入によって開く基部幅3.8cmを測って，大型といえるもの。また65も長さ4.5cmを測る大型のものであるが，片方の基部を損欠する。とくに基部は蟹股状で抉入はＶ字形を成す。前者とともに，その形態からみて，銛具としての機能をもったものかも知れない。66～75・78は，長形の三角形を成しており，また73・76は周縁部の剥離面が顕著な銛歯状を呈する。大半の基部は，凹形の無茎であるが，82のように平坦に近いものもみられる。84～88の黒色の黒耀石製のものは，他のものと比べて総体的にぶ厚い。これらの石鏃の出土は400点を越えており，利器としての石器では１番多かった。

細部調整石器　92は，最大長径13.5cm，最大幅７cmを測る片面調整石器である。片面側を両面から２次的細部調整したもので，片縁の石器。93は，最大長径15.5cm，最大短径8.5cmを測る片面調整の石器。背面は単撃による裂削，腹面側にも数打の打裂のみで成形し，片縁の背面に極浅形の細部調整を施すもの。94は，背面に単裂，腹面も数少ない打裂で削片された石器で，刃部面は弧状を成し，そこにやや粗い深形の剥離調整を施したもの。97は，母岩から削片されたもので，２方面に自然面を残し，その片面側の自然面に極浅形の細部調整されたもの。99は，つまみ部を欠く縦型の石匙かも知れない。両縁に剥離が調整されている。106は，楔形石器かも知れないが，三角状を成し，その１面側に急斜度の剥離を施したもの。材質は大半が安山岩質のものであるが，102・107は玄武岩質のものである。

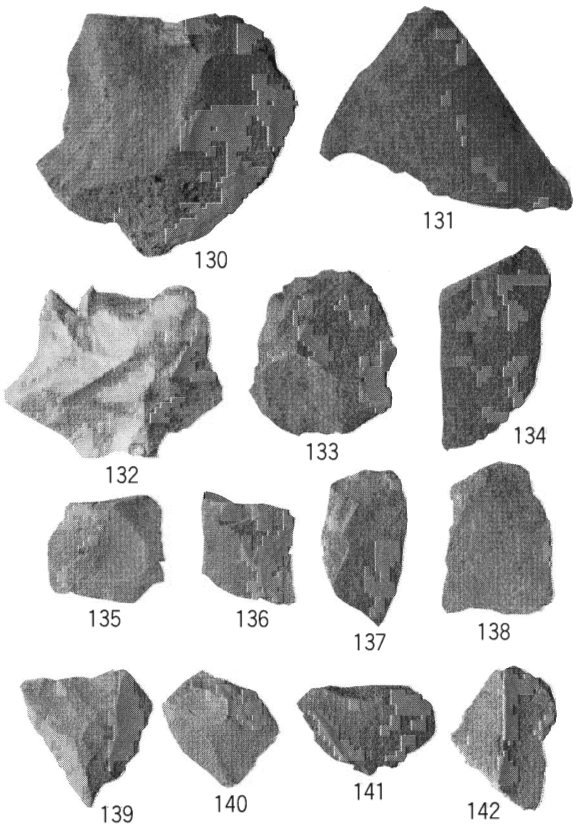
大型剥片　他の剥・砕片に比べると多くはない。これらの材質のほとんどは，冠山系の角閃石安



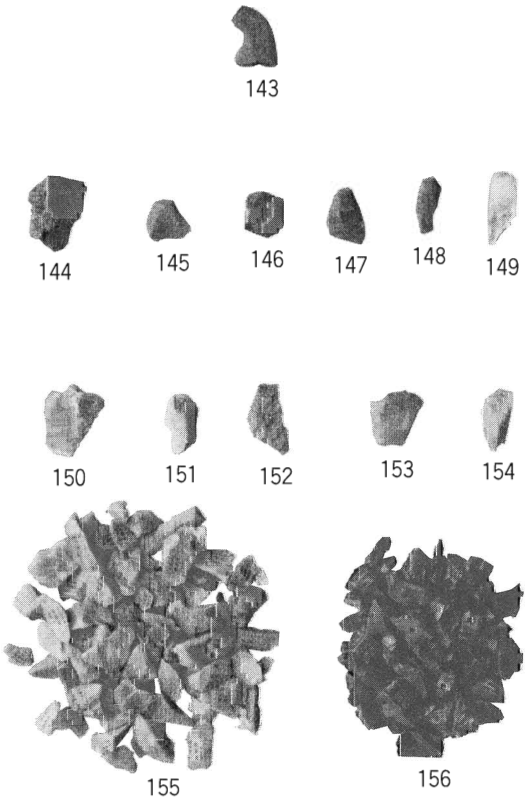
1．　細部調整のある石器（大片）



2．　細部調整のある石器（小片）・楔形石器



3．　大型剥片



4．　玦状耳飾・チャート片・水晶片・黒耀石片

図20　出土石器類 2

図21　石器集計表

出土地区 / 種別名	a区 二層	a区 三層上面	a区 三層下面	a区 垂直掘	b区 二層	b区 三層上面	b区 三層下面	c区 二層	c区 三層上面	c区 三層下面	d区 二層	d区 三層上面	d区 三層下面	e区 二層	e区 三層上面	e区 三層下面	f区 二層	f区 三層上面	f区 三層下面	畝ベルト	abベルト	aeベルト	afベルト	bcベルト	bdベルト	beベルト	cdベルト	deベルト	efベルト	SI・abベルト	遺構共伴遺物	拡張区1	拡張区2	拡張区ベルト	廃土	周辺地採集	合計
剥片・砕片(安山岩)	168	216	138	13	60	58	170	41	18	123	52	16	28	403	98	123	325	209	84	21	80	2	40	12	26	8	1	35	149	17	588	74	86	3	64	589	4138
〃(黒曜石・黒)	5	13	5		8	4	1	5	2	1				11	3	1	9	3	2		2					1			6		6	4	3			13	108
〃(黒曜石・白)	4	23	6		12	11	18	2	6	8	1			28	7	4	15	8	6	1	6		1		3	1			2	1	15	8	6				203
石核	4	11	15	2	4	3	20	5	1	8	2	2		19	6	5	16	37	9	3	3		4		3				7		25	5	10		3	51	283
石錘	2	2			2			1	1					1	2			3													2						16
石鏃(安山岩)	24	24	13		10	7	22	4	6	18	6	1	1	25	11	6	48	15	1		5		7	1	2	1	1	1	11	1	39	6	7		4	56	384
〃(黒曜石・黒)					1		1	1																							2	1					6
〃(黒曜石・白)	1	3			2		4							1		2		1													3				1		18
磨製石斧		1			1									1		1		3													1					4	12
打製石斧		5	2		5	4	3	2	2	2				1	1		3	1											1		3	1	1			21	58
石匙		3					3	1		2				4	3	1	1	1			2								1	1	4		1				28
石錐										1								1													1						3
掻器・削器			1													1		1													3						6
柳葉状石器		1	1											1	1	1	1	2			1 (尖頭器)								1		1						11
チャート片													1	1							3								1		1	1					8
水晶片																															1						1
敲石						1																													1		2
磨石			2			1				1				1	1	1		2													3						12
凹石			1													1	4													1	6		1				14
石篦状石器																																				1	1
玦状耳飾																															1						1

山岩質のもので，本地区の上流部には玄武岩・流紋岩あるいは凝灰岩質のものが産出される。大量の石器類の出土には，こうした産地との近隣性が大きく影響しているものと考えられる。

132は，乳白色の黒耀石で，最長径11.5cm，器重220ｇを測る大片のものである。両面に大振りな削片痕がみられ，石核であった可能性がある。おそらくこうした原石に近いものが本地に搬入され，石鏃などに製品化されたものであろう。

細部調整のある石器・楔形石器　110～117は小片で，細部調整が施されているもの，そして118～129は楔形石器類である。

玦状耳飾　143は，SK26-1の底部に出土したもので，3/2を損欠する。材質は蛇紋岩質のもので，器面全体は研磨され，平滑に仕上げている。色調は茶褐色を呈しており，火を受けたものと考えられる。また基部の断面が偏平であるので，轟Ｂ式系の土器と共伴したものの，形態的には大歳山系などの２期とする所産のものとも考えられる。

その他の剥・砕片類　144～148はチャート石片，149は水晶石片，150～154は乳白色の黒耀石剥片，155はその砕片など。また156は，黒色の黒耀石の剥・砕片類である。黒耀石においては，乳白色の姫島産と想定できるものが200片を越えるが，黒色系のものはその半分に過ぎなかった。

（渡辺友千代）

◇

本書の編集の最終段階で，辰馬考古資料館の矢野健一学芸員が来室され，ご教示をいただくことができた。また敦賀短期大学の網谷克彦助教授からも資料提供を受けるなど，ご協力をいただいたことに感謝したい。なおそのほか，下記の文献を参考にしました。

・戸沢充則編『縄文時代研究事典』東京堂出版　1994年
・木村幾多郎「曾畑式土器様式」『縄文土器大観１草創期早期前期』小学館　1989年
・同志社大学人文科学研究所「島根県菱根遺跡発掘報告」『出雲古文化調査報告書』1959年
・潮見浩「月崎遺跡」『宇部の遺跡』1968年
・間壁忠彦・間壁葭子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第７号　1971年
・藤田憲司・間壁葭子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号　1975年
・中村友博・柿本春次「神田遺跡」山口県教育委員会『第５次調査概報』1976年
・植田真「縄文土器について」米子市教育委員会『陰田』1984年
・柳浦俊一「岩塚Ⅱ遺跡」島根県教育委員会『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-Ⅱ-』1985年
・加茂川改良工事関係埋蔵文化財発掘調査団編「目久美遺跡」米子市教育委員会『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1986年
・内田律雄ほか『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区１）』島根県教育委員会1987年
・宮内克己・牧尾義則『羽田遺跡（Ⅰ地区）』1990年
・足立克己・角田徳行ほか「郷路橋遺跡」島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1991年

平成11年３月19日　印刷
平成11年３月29日　発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第28集

中ノ坪遺跡概要

発　行　　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見イ1260

印　刷　　第一法規出版株式会社
広島市中区上八丁堀５－21